

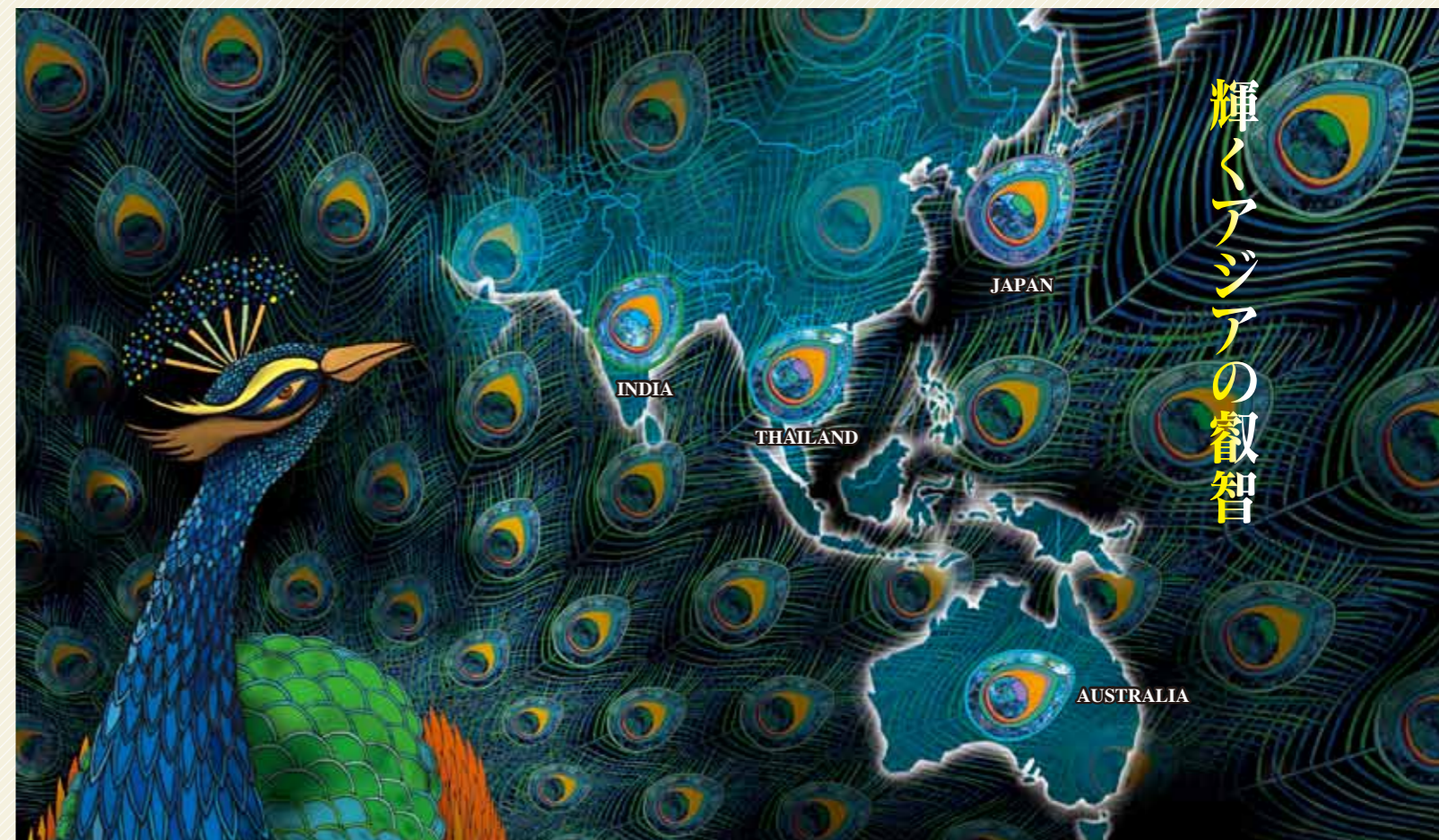


第24回

FUKUOKA PRIZE 2013

福岡アジア文化賞

主催：福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団 後援：外務省、文化庁



輝くアジアの叡智



大賞
中村 哲
日本 / 医師 (ベシワール会現地代表)



学術研究賞
テッサ・モーリス＝スズキ
オーストラリア / アジア地域研究者



芸術・文化賞
ナリニ・マラニ
インド / アーティスト

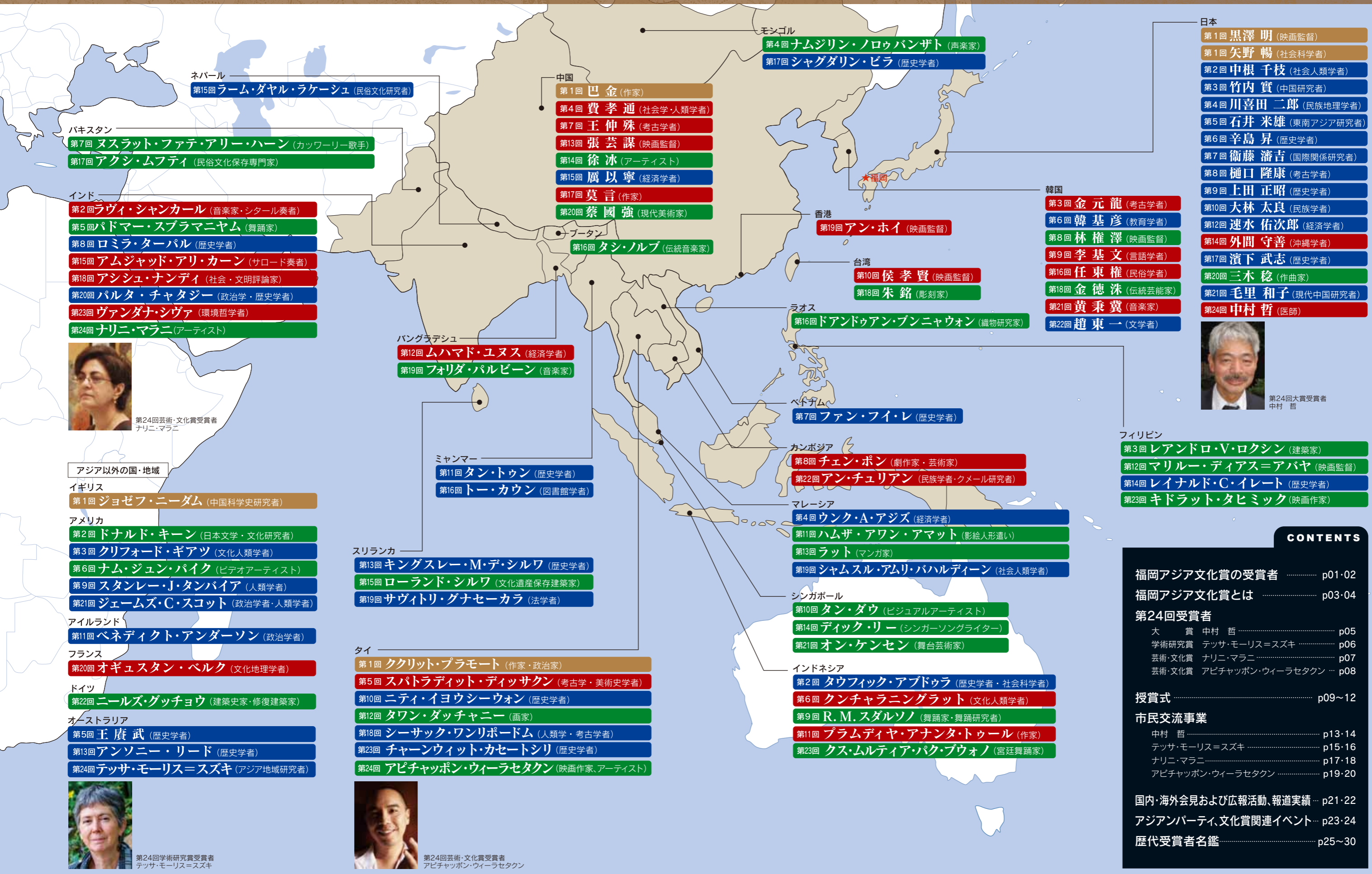


芸術・文化賞
アピチャポン・ウィーラセタクン
タイ / 映画作家、アーティスト

発行 / 福岡アジア文化賞委員会事務局
〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1
福岡市総務企画局国際部内
TEL 092-711-4930 FAX 092-735-4130
e-mail: acprize@gol.com
ホームページ: <http://fukuoka-prize.org/>
Facebook: <https://www.facebook.com/FukuokaPrize>



報告書



CONTENTS

福岡アジア文化賞の受賞者 p01-02

福岡アジア文化賞とは p03-04

第24回受賞者

- 大賞 中村 哲 p05
- 学術研究賞 テッサ・モーリス＝スズキ p06
- 芸術・文化賞 ナリニ・マラニ p07
- 芸術・文化賞 アピチャッポン・ウィーラセタクン p08

授賞式 p09~12

市民交流事業

- 中村 哲 p13-14
- テッサ・モーリス＝スズキ p15-16
- ナリニ・マラニ p17-18
- アピチャッポン・ウィーラセタクン p19-20

国内・海外会見および広報活動、報道実績 p21-22

アジアンパーティ、文化賞関連イベント p23-24

歴代受賞者名鑑 p25~30

福岡アジア文化賞の趣旨

アジアは、多様な民族、言語、文化が共に生き、交流する世界です。その多様な文化は、長い歴史と伝統を守り抜くだけでなく、新しいものをも生み出してきました。

今、グローバル化時代の到来により、文化面にも画一化の波が押し寄せ、アジア固有の文化が失われていく恐れがあります。このような時代にこそ、独自の文化を守り、育て、共生を進める必要があります。

福岡は、古くから日本の窓口として、アジア諸地域との交流において重要な役割を担ってきました。このような福岡の特性を踏まえて、アジア地域の優れた文化の振興と相互理解および平和に貢献するため、1990年に市、学界、民間が一体となって福

岡アジア文化賞を創設しました。以来、24年間で96人の素晴らしい受賞者に賞を贈り、その広がりにはアジアのほぼ全域にわたっています。

未来へつながる文化交流とは、長い歴史と伝統をもつ固有の文化を保存、継承するのみならず、変化の中から生まれようとする新しいものにも目を向け、尊重し、そこから学びながら新たに創造していくことであり、福岡市は、市民と共にアジアの文化交流都市を目指しています。

この賞を通じて、私たちは市民と共に、アジアの学術・芸術・文化に貢献した人々に敬意を表し、アジアの固有で多様な文化の価値を、これからは都市の視点で広く世界に伝えていきたいと考えています。

1. 目的

アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に顕著な業績を挙げた個人又は団体を顕彰することにより、アジアの文化の価値を認識し、その文化を守り育てるとともに、アジアの人々が相互に学び合いながら、幅広く交流する基盤をつくることに貢献することを目的とします。

2. 賞の内容

大賞	学術研究賞	芸術・文化賞
賞金 ¥5,000,000	賞金 ¥3,000,000	賞金 ¥3,000,000
アジアの固有かつ多様な文化の保存と創造に貢献し、その国際性、普遍性、大衆性、独創性などにより、世界に対してアジアの文化の意義を示した個人又は団体。	人文科学・社会科学などの、アジアを対象とした学術研究における優れた成果により、アジアの理解に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「学術研究」には歴史学、考古学、文化人類学、社会学、政治学、経済学などが含まれる	アジアの固有かつ多様な芸術・文化の育成又は発展に貢献するとともに、今後さらに活躍が期待される個人又は団体。 ※「芸術・文化」には美術、文芸、音楽、演劇、舞踊、映像、建築、伝統文化、民族文化などが含まれる

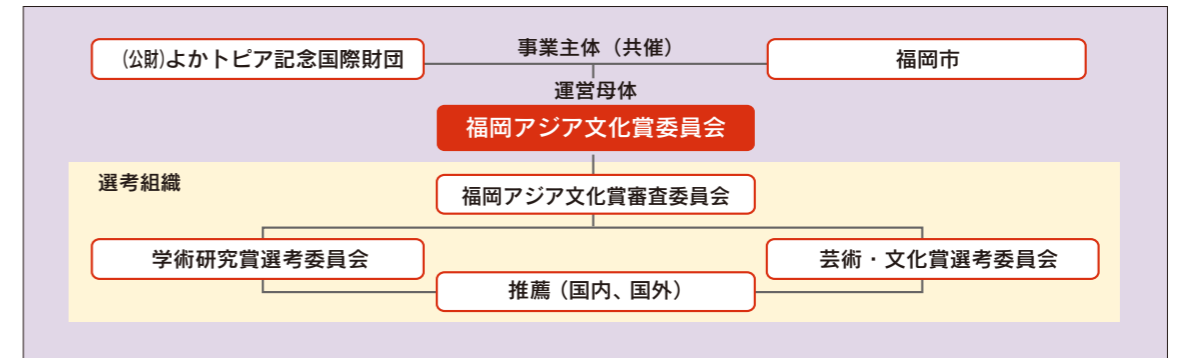
3. 対象圏域 東アジア、東南アジアおよび南アジア地域

4. 主催 福岡市、公益財団法人よかトピア記念国際財団

5. 運営・選考組織

- 福岡アジア文化賞委員会
賞の運営母体として、審査委員会で決定した受賞者を承認します。
- 福岡アジア文化賞審査委員会／学術研究賞選考委員会／芸術・文化賞選考委員会
各賞ごとに設けられた選考委員会で大賞および各賞受賞候補者を選考し、さらに各賞の選考委員長などで構成される審査委員会で総合的に審査し、受賞者を決定します。
- 推薦依頼
広く候補者を募るため、国内外の教育・研究機関、芸術・文化団体、報道機関など 7千人を超える関係者に、推薦を依頼しています。

運営・選考組織図



第24回福岡アジア文化賞のあゆみ

2013.2	54か国・地域約7,600人の推薦委員から推薦された30か国・地域の受賞候補者279名・団体について選考 芸術・文化賞選考委員会(3日) 学術研究賞選考委員会(17日)
2013.3	審査委員会(3日)にて審査
2013.4	審査・選考合同委員会(21日)
2013.6	文化賞委員会にて4人の受賞者を承認し福岡記者会見で発表(7日)
2013.7~8	オーストラリア(キャンベラ)記者会見(7月9日)、タイ(バンコク)記者会見(8月2日)
2013.9	授賞式(12日)、学校訪問(2日、11日、13日)、市民フォーラム(14日、15日)、アジア文化サロン(14日、15日)
2013.10	インド(ムンバイ)記者会見(26日)

福岡アジア文化賞 審査・選考委員

福岡アジア文化賞審査委員会	福岡アジア文化賞選考委員会 学術研究賞	福岡アジア文化賞選考委員会 芸術・文化賞
委員長 有川 節夫 九州大学総長 福岡アジア文化賞委員会副会長	委員長 稲葉 継雄 九州大学名誉教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員	委員長 藤原 恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員
副委員長 貞刈 厚仁 福岡市副市長 福岡アジア文化賞委員会副会長	副委員長 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員	副委員長 宇戸 清治 東京外国語大学大学院総合国際学研究院言語文化部門教授 福岡アジア文化賞審査委員会委員
委員 稲葉 継雄 九州大学名誉教授 学術研究賞選考委員会委員長	委員 天児 慧 早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科教授	委員 石坂 健治 日本映画大学教授 東京国際映画祭アジア部門ディレクター
委員 宇戸 清治 東京外国語大学大学院総合国際学研究院言語文化部門教授 芸術・文化賞選考委員会副委員長	委員 石澤 良昭 上智大学アジア人材養成 研究センター特任教授	委員 後小路 雅弘 九州大学大学院人文科学 研究院教授
委員 川村 裕 国際交流基金統括役	委員 河野 俊行 九州大学大学院法学研究院教授	委員 内野 儀 東京大学大学院総合文化 研究科教授
委員 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授 学術研究賞選考委員会副委員長	委員 末廣 昭 東京大学社会科学研究所教授	委員 川村 湊 法政大学国際文化学部教授
委員 土屋 直知 株式会社正興電機製作所 代表取締役会長	委員 竹中 千春 立教大学法学部教授	委員 小西 正捷 立教大学名誉教授
委員 藤原 恵洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授 芸術・文化賞選考委員会委員長	委員 新田 栄治 鹿児島大学法学部教授	委員 細川 周平 国際日本文化研究センター教授

2013年12月現在



中村 哲

日本/異文化理解・国際(民際)協力 **NAKAMURA Tetsu**

医師、PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長・ペシャワール会現地代表

- 主な経歴**
- 1946 福岡県生まれ
 - 1973 九州大学卒業(医学部)
 - 1973-75 国立肥前療養所
 - 1975-80 大牟田労災病院
 - 1982 神経病学専門医
 - 1984 英国リバプール熱帯医学校 熱帯医学専門医(DTM&H)
 - 1984-94 ペシャワール・ミッション病院ハンセン病棟医長(パキスタン)
 - 1984- ペシャワール会現地代表
 - 1986-98 JAMS(ジャパン・アフガン・メディカルサービス)顧問(パキスタン、アフガニスタン)
 - 1998-2002 PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)院長
 - 2002- PMS総院長

※現地発音ではペシャワール

- 主な経歴**
- 1988 外務大臣表彰(外務省)
 - 1992 毎日国際交流賞(毎日新聞)
 - 1993 西日本文化賞(西日本新聞)
 - 1996 読売医療功労賞(読売新聞) 厚生大臣賞(厚生省)
 - 1998 朝日社会福祉賞(朝日新聞)
 - 2003 マグサイサイ賞「平和と国際理解部門」
 - 2009 農業農村工学会賞(旧 農薬土木学会)
 - 2010 アフガニスタン国会下院 表彰

- 主な著作**
- 『医は国境を越えて』石風社、1999.
 - 『辺境で診る 辺境から見る』石風社、2003.
 - 『医者、用水路を拓くーアフガンの大地から世界の虚構に挑む』石風社、2007.

●**贈賞理由**

中村哲氏は、パキスタンとアフガニスタンで、30年にわたり患者、貧者、弱者のための医療や開拓・民生支援の活動を続けてきた。現地での経験に基づく深い思索と発言・著作は、異文化の理解と尊重を求め、真の平和構築を目指す知的営為として、国際的に高く評価されている。

中村氏は、1946年に福岡市に生まれ、1973年に九州大学医学部を卒業後、国内の病院勤務を経て、1984年にパキスタン北西辺境州の州都ペシャワールのミッション病院に赴任した。以来、貧困層に多いハンセン病や腸管感染症などの治療に始まり、難民キャンプや山岳地域での診療へと活動を広げた(『医は国境を越えて』)。また今世紀に入って頻発する干ばつに対処するためにアフガニスタンで1,600本の井戸を掘り(『医者井戸を掘る』)、クナール川から全長25.5キロの灌漑用水路を建設し(『医者、用水路を拓く』)、現在では15,000ヘクタール余の農地を回復・開拓した。用水路工事は雇用を生み、難民の帰還を促すとともに、農地の回復は彼らが農民として平和に暮らすことを可能とした。その数は50万人を超える。

中村氏の活動は、ペシャワール会の現地代表と

して医療や国際協力の現場で自ら汗をかき率先垂範するだけにとどまらない。そこでの体験に裏付けされたイスラームに関する理解や現代世界に対する洞察を、ペシャワール会の会報や新聞、雑誌等に発表し、平和的手段による社会改革を広く市民に訴え続けている(『辺境で診る 辺境から見る』、『空爆と「復興」』、『丸腰のボランティア』)。10冊を超える平易で読みやすい著書は、アフガニスタンの現状をふまえた比較文化論であり、現地の人々の立場に身を寄せ、もう一つの別の視点から世界を見ること、考えることへと読者を誘う。

異文化への深い理解をもとに、自文化の相対化や内省を伴いながら、より良い社会のあり方を模索するという知的営為は、国際協力の基本姿勢である。現地の文化と人々を尊重することを最優先に続けられてきた中村氏の活動は、異文化理解と国際協力の理念の実践であり具現である。文化の振興と相互理解および平和に貢献するために創設された福岡アジア文化賞の精神を、30年にわたる活動で体現している中村哲氏は、まさに「福岡アジア文化賞一大賞」にふさわしい。



テッサ・モーリス＝スズキ

オーストラリア/アジア地域研究 **Tessa MORRIS-SUZUKI**

アジア地域研究者(オーストラリア国立大学教授・オーストラリア研究会議特別フェロー)

- 主な経歴**
- 1951 英国サリー州ケーターハム生まれ
 - 1980 英国バース大学博士号(経済史)
 - 1997- オーストラリア国立大学アジア太平洋研究学院教授
ニューイングランド大学博士号(経済学)
 - 1998-2002 オーストラリア外交問題評議会委員
 - 1999-2000 一橋大学社会学部客員教授
 - 2000-04 アジア学アジアネットワーク代表
 - 2001-02 オーストラリア、アジア学会会長
 - 2004-05 オーストラリア国立大学アジア太平洋学部長
 - 2004- アジア市民権ネットワーク創設者、代表
アジアライツ(アジア市民権ネットワークのオンラインジャーナル)編集者
 - 2008-09 ハワイ大学東西センター、POSCO客員フェロー
 - 2009-10 東京大学大学院学際情報学府客員研究員、国際交流基金フェロー
 - 2010 早稲田大学高等研究所客員教授
 - 2012 オーストラリア研究会議特別フェロー

- 主な著作**
- 『日本の経済思想ー江戸期から現代まで』ロンドン、ニューヨーク:ラウトリッジ/日産日本問題研究所(オックスフォード大学), 1989.
 - 『辺境から眺めるーアイヌが経験する近代』東京:みすず書房, 2000.
 - 『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本』東京:平凡社, 2002, 2013.

●**贈賞理由**

テッサ・モーリス＝スズキ氏は、卓越したアジア地域研究者である。氏は、北東アジア社会についてのこれまでの認識を、グローバルな視座とローカルな視座から鋭く問い直し、斬新な思想的課題を提起し続けてきた。

モーリス＝スズキ氏は1951年英国に生まれ、プリンスストル大学でロシア史を学んだ後、バース大学で日本経済史の研究により博士号を取得。89年『日本の経済思想ー江戸期から現代まで』を発表し、日本型の成長モデルが注目を集めた1980年代、新進気鋭の学者として登場した。

1981年ニューイングランド大学で経済史の講師、90年同大学准教授、92年オーストラリア国立大学アジア太平洋研究学院シニア・フェロー。97年同アジア太平洋研究学院日本史教授に就任。オーストラリア・アジア学会会長やアジア学アジアネットワーク代表など要職を歴任し、日本研究やアジア研究を主導した。

1990年代半ばより、モーリス＝スズキ氏は自らの関心を経済から政治や文化の方向に移し、カルチュラル・スタディーズの領域にも足を踏み入れて、「脱近代」と「脱植民地化」の視点から論陣を張った。特に、主著の『辺境から眺めるーアイヌが経験する近代』では、近代国家の下で「辺境」に追いやられ、国民社会において「他者」として扱われてきたアイヌの人々の体

験を、北東アジアの広がりを背景にみごとに描き出し、日本国内外から高い評価を獲得した。

知の創造には、研究方法の革新が必須である。これまでの実証研究においては、国家の公文書や重要人物の著作が信憑性のある史料とされてきた。だが、モーリス＝スズキ氏は、こうした研究の限界を打ち破り、民衆的な記憶や経験を掘り起こすため、先駆的な研究方法を切り拓いた。現地を旅して関係者と対話し、その土地固有の資料・史料を発掘した。諸国で収集した様々な情報を結びつけ、国家や地域の枠組みを超えた広がりの中で、人々の新しい物語を紡ぎ出す氏の文章は、凛として美しい。

モーリス＝スズキ氏のまなざしは、常に、社会の端にたたくみ、権力から遠く離れて生きる人々に向けられている。近年は学術研究と並んで、多文化主義を掲げるオーストラリアを足場に、アジア市民権ネットワーク代表としても活躍している。

民族や国家の境界を乗り越えて、人が人らしく生きられる社会を希求できるか。民主主義の時代、これは市民一人ひとりの問いである。国家の枠組みを超えた新しい地域協力のあり方を社会の端から構想し、アジアの人々の相互理解に寄与してきたテッサ・モーリス＝スズキ氏は、グローバルな知識人としてまさに「福岡アジア文化賞ー学術研究賞」にふさわしい。



ナリニ・マラニ

インド/現代美術

Nalini MALANI

アーティスト

●主な経歴

- 1946 インド(現パキスタン)、カラチ生まれ
- 1969 サー・J.J. 美術学校卒業(ムンバイ、インド)
- 1970-72 フランス政府奨学金給費生として、パリに留学
- 1984-89 インド政府アート・リサーチ・フェロー
- 1989 USIA(米国広報・文化交流庁)フェローシップにて
ファイン・アーツ・ワーク・センター滞在アーティスト(ケープコッド、米国)
- 1999-2000 福岡アジア美術館滞在アーティスト(日本)
- 2001-03 アムステルダム国立美術アカデミー特別顧問(オランダ)
- 2010 サンフランシスコ・アート・インステチュート芸術名誉博士号(米国)
- 2013 ポンピドー・センター「イン・ヴィヴオ」(講演とパフォーマンスのシリーズ)にて講演(パリ、フランス)

●主な個展

- 「トーバ・テック・シンを思い出して」プリンス・オブ・ウェールズ博物館(ムンバイ、インド)1999
- 「ナリニ・マラニ:ハムレットマシン」ニュー・ミュージアム・オブ・コンテンポラリー・アート(ニューヨーク、米国)2002-03
- 「根源を晒す:ナリニ・マラニの絵画作品」ピーボディ・エセックス博物館(セイラム、マサチューセッツ州、米国)2005-06
- 「ナリニ・マラニ」アイルランド現代美術館(ダブリン、アイルランド)2007
- 「ナリニ・マラニ:影に耳を傾ける」アラリオ・ギャラリー(ニューヨーク、米国)2008
- 「ナリニ・マラニ:内在する他者との分裂」カントナル・デ・ボザール美術館(ローザンヌ、スイス)2010
- 「インスタレーションビデオ作品展「母なるインド」」ニュー・サウス・ウェールズ州立美術館(シドニー、オーストラリア)2012

●贈賞理由

ナリニ・マラニ氏は、アジアを代表する美術家として、国際的に高い評価を得ている。インド亜大陸の近現代史と向き合い、映像と絵画を組み合わせた大がかりな空間造形を通して、宗教対立や戦争、女性への抑圧、環境破壊など、今日的かつ普遍的なテーマに挑み続けてきた。

マラニ氏は、1946年、パキスタン(当時は英領インド)のカラチに生まれた。翌1947年、インド、パキスタンの英国からの分離独立の混乱の中、マラニ一家はインドのコルカタへ逃れた。1969年にムンバイのサー・J.J.美術学校を卒業した後、フランス政府奨学金給費生としてパリに留学、1973年に帰国してムンバイを拠点に制作活動を続けている。1987年、インドで初めての女性アーティストによる女性アーティスト展「鏡の向こうに」を企画開催して注目され、1990年代になると初めてのインスタレーション作品の制作や観衆参加による公開制作・討論の展覧会「欲望の都市」を開催するなど、インド国内で高まったヒन्दゥ至上主義に対する危機感をバネに、保守的なインドのアートシーンに新たな表現領域を切り拓いた。アジア太平洋トリエンナーレ(ブリスベン、1996)、ニュー・ミュージアム(ニューヨーク、2002)での個展のほか、ヴェネチア・ビエンナーレ(2007)、ドクメンタ(カッセル、

2012)など数々の国際展に招かれ、欧米、アジアで開かれるインド現代美術展の中核的存在として活躍している。また、福岡アジア美術館での滞在制作(1999-2000)や、国立新美術館でのアーティストトファイル展(2013)など、日本でもたびたび紹介されてきた。

マラニ氏はその作品において、インスタレーションのような現代的な表現形式を取りながら、ガラス絵や影絵芝居、走馬灯、神々を描いたカリガート民俗画など、伝統的な民衆の造形世界と深く結びついた懐かしい温もりや夢のような幻想性を醸し出している。しかし、その主題は、原理主義による宗教対立、戦争や核問題、女性への暴力や抑圧、環境破壊など、世界が直面する深刻な課題や矛盾に回答するものであり、多様なイメージの断片を重ね合わない多層的な物語を生み出している。

世界が直面する困難な課題を題材に、インドの伝統に根ざしながら新鮮な表現を追求した作品を意欲的に発表して、国際的な評価を確固たるものとし、アジアを代表する女性アーティストとなったナリニ・マラニ氏は、まさに「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい。



アピチャップン・ウィーラセタクン

タイ/映画、視覚芸術

Apichatpong WEERASETHAKUL

映画作家、アーティスト

●主な経歴

- 1970 タイ、バンコク生まれ
- 1994 コーンケン大学卒業(建築学) 短編映画、ショート・ビデオ制作開始
- 1997 シカゴ美術館附属美術大学大学院修士号(美術・映画制作)
- 1998 アート作品や映像インスタレーションの創作活動開始
- 1999 制作プロダクション「キック・ザ・マシーン」を設立
- 2000 初の長編映画「真昼の不思議な物体」を発表
- 2001 第7回山形国際ドキュメンタリー映画祭優秀賞(「真昼の不思議な物体」)
- 2002 第55回カンヌ映画祭「ある視点」部門賞(「プリスフリー・ユアーズ」)
第3回東京フィルメックス最優秀作品賞(「プリスフリー・ユアーズ」)
- 2004 第57回カンヌ映画祭審査員賞(「トロピカル・マラディ」)
第5回東京フィルメックス最優秀作品賞(「トロピカル・マラディ」)
- 2005 タイ王国文化省よりシラバートン章
- 2008 フランス芸術文化勲章シュヴァリエ章
- 2009 映像インスタレーション作品「プリミティブ」発表
- 2010 第63回カンヌ映画祭最高賞(パルム・ドール)(「ブンミおじさんの森」)
- 2011 フランス芸術文化勲章オフィシエ章
- 2013 シャルジャ・ビエンナーレ賞

●主な作品

- 「プリスフリー・ユアーズ」(監督、脚本、製作、2002) Blissfully Yours
- 「プリミティブ」プロジェクト(映像インスタレーション他)(制作、2009) The Primitive Project
- 「ブンミおじさんの森」(監督、脚本、製作、2010) Uncle Boonmee Who Can Recall His Past Lives

●贈賞理由

アピチャップン・ウィーラセタクン氏は、制作・監督のみならず脚本・編集までを自ら行う気鋭の映画作家として、世界の映画界に大きな旋風を巻き起こしている。鬱蒼たる森を舞台に据え、民話や伝説に基づく物語のなかに個人的な記憶や前世のエピソード、時事問題に対する言及などを挿入する斬新な映像話法を用いた作品群は、国際的に高く評価されている。

1970年バンコクに生まれ、タイ東北部のコーンケン県で育ったアピチャップン氏は、コーンケン大学で建築学を学んだのちに渡米し、1997年にシカゴ美術館附属美術大学大学院(SAIC)で美術部門(映画制作)の修士号を取得した。在学中より実験的な短編作品を次々と発表し、帰国後の1999年に自らの制作プロダクション「キック・ザ・マシーン」を設立して本格的に映画制作を開始した。

2000年の長編第1作「真昼の不思議な物体」は、旅の途上でカメラを向けた人々に「不思議な物体」の物語をリレー式に語り継がせるという、従来の脚本や監督の概念を覆す手法で注目された。ミャンマー人移民労働者の青年とタイ人女性が森の中で交流する第2作「プリスフリー・ユアーズ」(2002)でカンヌ映画祭の「ある視点」部門賞を受賞、さらに若い兵士が前世で人間だったという虎と密林で遭遇する「トロピカル・マラディ」(2004)で同審査員賞を

受賞した。そして2010年に「ブンミおじさんの森」で、タイ人初となるカンヌ映画祭最高賞(パルム・ドール)を受賞。深い森に住む死期の迫った主人公ブンミのもとに、亡くなった妻や猿に変身した息子が現れるという独特の死生観・人間観に満ち、かつて民主化運動の弾圧に加わったブンミの記憶や前世の逸話も挿入される本作は、デビュー以来10年の歩みが集成された代表作となり、日本でも一般公開されて人気を博した。

アピチャップン氏は、映画制作と並行して1998年以来、美術の分野でも映像インスタレーションを中心に旺盛な創作活動を繰り広げており、近年の「プリミティブ・プロジェクト」では、映像インスタレーション、長編映画、プロジェクトの世界観を示した美術図書など、アートの諸領域を横断する複合的な創作を行っている。「ブンミおじさんの森」も同プロジェクトの一部に位置付けられている。

このようにアピチャップン・ウィーラセタクン氏は、斬新な映像表現を生み出す若い世代の旗手として世界の映画界に大きな刺激を与え、ジャンルにとらわれない多彩な創作活動を展開している。その業績は、まさに「福岡アジア文化賞—芸術・文化賞」にふさわしい。

※タイ語の発音に最も近いカタカナ表記は「アピチャートポン・ウィーラセタクン」ですが、代表作「ブンミおじさんの森」の公式HPをはじめとして、「アピチャップン・ウィーラセタクン」の表記がすでに広く用いられているため、福岡アジア文化賞では当該表記を採用しています。

第24回 福岡アジア文化賞 授賞式

■日時:9月12日(木)
 ■会場:福岡シンフォニーホール(アクロス福岡)
 ■司会:ジュディ・オング



第24回 福岡アジア文化賞授賞式 秋篠宮殿下お言葉

本日、第24回福岡アジア文化賞の授賞式が開催されるにあたり、受賞される4名の方々に、心からお祝いを申し上げます。

近年、国際社会におけるグローバル化の進展に伴い、アジア諸地域においても画一化された思考方法や生活様式が広まりつつあります。その一方、豊かな自然と風土に生まれ、独自の文化を育んできた各地域では、それぞれに固有の文化を保存し継承していくとともに、新しい文化を創造していくことにも多くの努力を重ねております。私自身、アジアの諸地域を訪れるたびに、土地固有の文化の多様性とその深さに感銘を受けるとともに、それらの保存と継承の重要性を強く感じております。

福岡アジア文化賞は、アジアの固有で多様な文化の保存と継承、そして創造に貢献することを目的とするものであり、大変意義深いものと考えます。本日、受賞される皆様の優れた業績は、アジアのみならず世界にその意義を広く示すとともに、社会全体で共有し、次の世代へと引き継がれる人類の貴重な財産になるものと思われま。

終わりに、受賞者の皆様に改めて敬意を表しますとともに、この福岡アジア文化賞を通じて、アジア諸地域に対する理解、そして国際社会の平和と友好がより一層促進されることを祈念し、私のあいさつといたします。



第24回福岡アジア文化賞の授賞式は、秋篠宮同妃両殿下の御臨席を賜り、市民をはじめ各国の来賓、各界関係者などが一堂に会して開催され、受賞者の栄誉を讃えました。

今年の授賞式は、韓国のオペラ歌手チョン・セフン氏の独唱という荘厳な演出で幕を開け、栄えある4人の受賞者は客席中央を通り、盛大な拍手を浴びながら登壇。高島宗一郎福岡市長が「今年、アジアマンスから、より創造的な取り組みとして生まれ変わった「アジアンパーティ」の中で、受賞者からの示唆を新たな価値の創造につなげたい」とあいさつ。続いて秋篠宮殿下より祝福のお言葉を賜り、福岡アジア文化賞審査委員長の有川節夫九州大学総長から選考過程が報告されました。その後、高島市長と鎌田迪真よかトピア記念国際財団理事長が、受賞者それぞれに賞状とメダルを贈呈。受賞者による感謝と喜びのスピーチに続いて、市民代表からお祝いの言葉が贈られ、福岡インターナショナルスクールの子どもたちが花束を手渡すと、会場は盛大な拍手に包まれました。

第2部では、4人の受賞者が会場の市民の質問に答える形で対談を展開。「活動の際に大切にしていること」や「夢」について受賞者がそれぞれ思いを披露。中村哲氏からは「単なる文化の違いを、善悪や優劣で判断してはいけません。その意味でも、この賞が果たす役割は非常に大きい」と賞への期待が語られました。最後にチョン・セフン氏が再び登場し、男女の両パートを、一人でダイナミックに歌う歌唱で授賞式を華やかに締めくくりました。

式次第	
【第1部】	開式 受賞者紹介 主催者代表あいさつ お言葉 選考経過報告 贈賞 受賞者あいさつ 市民代表お祝いの言葉
	福岡市長 高島 宗一郎 秋篠宮殿下 福岡アジア文化賞審査委員会委員長 有川 節夫 福岡市長 高島 宗一郎 (公財)よかトピア記念国際財団理事長 鎌田 迪真
【第2部】	受賞者とジュディ・オングさんとの対談 特別公演 チョン・セフン氏による歌唱 ～ミュージカル「オペラ座の怪人」より「Think of Me」～ 閉式



受賞者に賞状とメダルを贈る鎌田よかトピア記念国際財団理事長(左)



ジュディ・オングさんによる司会 「祝福の心をこめて」熱唱するチョン・セフンさん



受賞者とジュディ・オングさんの対談

祝賀会

授賞式に引き続いて各国の来賓、各界関係者、アジアフォーカス・福岡国際映画祭のゲストなど多数の参加を得て祝賀会を開催。「受賞者の皆様のスピーチに感銘を受けました」という鎌田理事長の開会あいさつに続き、駐日インド大使によるあいさつ、駐日アフガニスタン大使による乾杯の発声で、いよいよ開宴。厳かな式典とは違って各受賞者も同伴者の皆様もリラックスした表情を見せ、和やかな雰囲気。会場のあちこちには受賞者を囲んで談笑の輪が広がり、お互いの出会いや思い出を語り合いながら、受賞者を祝福しました。



鎌田理事長による開会あいさつ



アジアフォーカスより参加



駐日インド大使によるあいさつ



駐日アフガニスタン大使によるあいさつ



大賞
Grand Prize

**人も自然の一部。自然と人、
人と人とが和する道を探る。**

中村 哲

福岡アジア文化賞を授与される栄誉に、感謝と喜びを申し上げます。アフガニстанは過去35年間、戦乱と外国の干渉に悩まされ、大規模な干ばつと洪水のため、人々は生存する空間を失いつつあります。温暖化による気候変化の影響は甚大であり、かつての農業立国の食料自給率は半減し、ひん死の状態だと言えます。私たちは医療団体ですが、国際支援では水の欠乏は重視されなかったため、自ら飲料水源の確保、水利・取水設備の充実に力を入れてきました。現在、私たちは16,500haの面積に65万人の農民が生きていく空間を確保する、一つの復興モデルを完成しようとしています。

戦争は絶対に解決になりません。軍事干渉は事態を一層悪くしてきました。これはアフガニстанだけ

の問題ではなく、国際社会の暴力化、多様性を許さない画一化の中でアジア全体が貧困にあえいでいます。食糧不足だけでなく、伝統文化や故郷、人間の誇り、そして和を失い、経済発展のためなら手段を選ばぬ「精神と道義の貧困」がまん延しています。自然を思いのまま操作できるという錯覚は、世界に致命的な荒廃をもたらします。自然から遊離するパベルの塔はやがて倒れるでしょう。人も自然の一部。あらゆる人の営みが、自然と人、人と人とが和する道を探る以外、生き延びる道はありません。

今回、過去の受賞者たちの主張を見て、驚くほど共感できるものが多く、自分は決して孤立していないことを知り、大きな励みとなりました。この声やがて大きな潮流となることを祈ります。



芸術・文化賞
Arts and Culture Prize

**迫害を克服するために、両性に
存在する女性の視点が必要。**

ナリニ・マラニ

この素晴らしい福岡アジア文化賞をありがとうございます。受賞を知らされたとき、過去にヴァンダナ・シヴァ氏やロミラ・ターパル氏という、インドにとって非常に重要な2人の女性が受賞していることが分かり、私は大変誇りに思いました。しかし、受賞者の歴史を深くひも解きますと、賞の創設以来、男性のビジュアル・アーティストの受賞はありましたが、アジアの女性ビジュアル・アーティストは誰も受賞していないことに気づきました。ですから、今回の受賞は男性優位の状況を打破したものであり、大変に勇気づけられるものです。

本日、私はアジアの実験的なビジュアル・アートに

貢献したことに対する受賞だけでなく、インドをはじめアジアの女性アーティストを代表しての受賞という栄誉に浴しております。21世紀における我々の未来は、女性の視点を認識することが一層求められると信じています。この女性の視点は、男性、女性の双方に存在します。世界で巻き起こっている環境や政治的、経済的、そして軍事的惨事を乗り越えるには、これまで以上に女性の視点が必要です。地球規模で、より人間味と思いやりのある社会へとパラダイムシフトしていくために、私が少しでも貢献できればと思います。「ナマステ」。



学術研究賞
Academic Prize

**平和な未来を築くため、
希望を携え、ともに歩む。**

テッサ・モーリス＝スズキ

この受賞は大変な名誉であり、光栄に存じております。日本と近隣アジア諸国の国際関係を研究する者として、福岡市からいただく賞には特別な感慨を覚えます。福岡は日本とアジアの関係史において中心的な役割を果たしてきました。現在、世界経済のけん引車であり、文化的エネルギー源でもある東アジアの国々が、偏狭なナショナリズムの発露でいがみ合うことなく、互いに力を合わせて平和な未来を築き上げることの重要性は、いくら強調しても足りません。私は研究者となって30年以上経ちますが、研究に多くの示唆を与えてくださった学界の人々だけでなく、日本とアジア諸国の架け橋となる、静かで力強いコ

ミュニティ活動をされている方々に、特別の賛辞とこの受賞を捧げようと思います。もちろん、そのうちの一人はペシャワール会の中村哲さんです。

アジアの和解と協力のために活動を続ける方たちは、メディアや政治から正当な評価を受けることがあまりありません。日韓両国の草の根連携のために活動する韓国の組織のモットーは「我、希望する。故に我あり」です。日本とアジア諸国の架け橋となろうとするすべての人々へ、あなた方は未来に向けての希望です。あなた方の活動は価値ある貴重なものであり、決して無駄になることはありません。希望を携え、未来に向けてともに歩みましょう。



芸術・文化賞
Arts and Culture Prize

**新しい視点に心を開放し、
他人の記憶に身を置く体験。**

アピチャップン・ウィーラセタクン

素晴らしい受賞者の皆様とともに、この賞を受賞できますことを光栄に思います。ここで私のささやかな記憶を皆様と共有したいと思います。私はタイの東北の小さな町で育ちました。木造の我が家にはグアバの木があって、はじめて登ったとき、私は素晴らしい光景を見ることができました。それはコンクリート・タイルでできた普通の屋根でしたが、いとも簡単に視点を変えることによって得られる喜びを教えてくださいました。例えば、自転車に乗ったり、映画を作ったりするとき、私はグアバの木の上で経験したことを思い出します。つまり、新しい視点に心を開くということ。前世のことを思い出すことができるとしたら、どんな気持

ちなのか、とか。それは他人の記憶に身を置くことでもあります。

いま、私たちはマウスをクリックするだけで、情報を共有できる時代にいますが、多様性の美学とともに残ぎゃくな行為や偏見にも気付かされます。私たちはひたすら思い出し、記録しなければなりません。グアバの木の先を想像するのは、そんなに難しいことではありません。世界を大きな家だと考えればいいのです。私たちの行為は他人にとっても重要な行為です。今日、私は映画制作を続け、昔を振り返り、謙虚になる勇気を、皆様からもらいました。この記憶を心に深く留めておきたいと思います。

第24回 大賞 受賞者

中村 哲
NAKAMURA Tetsu

日本／異文化理解・国際(民際)協力

Tetsu Nakamura



市民フォーラム

いのち アフガニスタンに生命の水を ～国際医療協力の30年～

■開催日／2013年9月14日(土)13:00～15:00
■会場／アクロス福岡地下2Fイベントホール・市役所15階講堂
■参加者／700人



温暖化の進行は他人事ではない 問い直せ、人間と自然の関係

<第一部 基調講演>

アフガニスタンには「金がなくても生きていけるが、雪がなければ生きていけない」ということわざがあります。同国は農業国であり、雪解け水が恵みをもたらしてきたからです。多民族国家であり、部族ごとの自治性と割拠性が強く、中央からの指示が届きにくい風土であり、また貧富の格差は甚大です。1984年、ペシャワール会はパキスタンでハンセン病治療の活動を開始。言葉も宗教も習慣も違う土地で、患者の気持ちを理解することは生やさしいことではありませんでした。外国人が陥りやすい過ちは、自分たちに馴染みのないものに対して、単なる文化の違いなのに優劣や善悪で捉えてしまうことです。私たちは宗教も含めて現地の文化慣習を、そのまま受け入れることを鉄則としていました。

1979年のアフガン戦争で侵入したソ連軍が撤兵後、91年に湾岸戦争が勃発し、あらゆる国際団体が撤退します。私たちの活動は15年を経過し、自前の組織と病院を建設・維持し、日本からの補給があれば、診療を続けられる体制を確立。96年タリバン政権復帰後、大幅に治安が改善され、私たちも武装なしでの移動が可能になりました。ところが、2000年春に世紀の大干ばつが発生。1,200万人が被災し、500万人が飢餓線上、100万人が餓死線上に置かれました。飢えや乾きは薬や医療

技術では治せず、無力感に捕らわれました。そこで飲料水源を確保するため1,600本の井戸を掘り進めました。

しかし、2001年ニューヨークでの同時多発テロの翌日、ブッシュ米大統領はアフガニスタン空爆を宣言。空爆下、私たちは首都の20数万人の避難民に1,800トンの小麦粉と食用油を配給しました。こうした活動は、同胞のためなら命も惜しまない勇敢なアフガニスタン人によって支えられています。その後、タリバン政権が倒れて米軍が進駐すると、ケシ栽培が再び盛大に復活し、数年で世界の93%を産出する麻薬立国となりました。

大干ばつは温暖化とともに現在も進行中であり、決して他人事ではありません。農業用水の確保のため、診療所より水路建設を優先して着手しましたが、現地の人々が資金をかけずに維持できるかたちでないといけません。アフガニスタンと日本は取水技術に似たところがあると気づき、約220年前に完成した筑後川の山田堰の斜め堰や、竹カゴに石を詰めて護岸に使う蛇カゴの技術を活用。数年間で田園が復活しはじめました。現地の農民の願いは、ただ2つだけ。三度のご飯が食べられることと、自分の故郷で家族と平和に暮らすことです。35年間、戦争と飢餓に苦しめられてきたのに、みんな暗い顔をしていません。どうかすると、我々の方が暗い顔です。金まわりがよくなれば幸せになる、武器さえあれば自分たちの身は守られる、という迷信

もやがて崩れるでしょう。いま問い直すべきことは、人間と自然の関係ではないでしょうか。

何が起こるか分からない、それが自然

<第二部 対談>



●コーディネーター
清水 展
京都大学東南アジア研究所 所長・教授



●対談者
菅原 文太
俳優・農業生産法人代表・いのちの党代表

ペシャワール会の紹介DVDのナレーションを担当した縁で、交流を続ける菅原氏と中村氏。清水氏が「人間と自然の関係を尋ねると、中村氏は「自然はコントロールなんて絶対にできません。いま活断層があるから原発は造らない、ないから造る、みたいに検討されていますが、そんなバカな議論はない。何が起こるか分からないのが自然ですから」と指摘。農業を実践する菅原氏は「戦前は今より国土が豊かで、私も山や川で夢中で遊んだ覚えがあります」と語り、今の子どもたちはそんな経験が出来ないことへの懸念を示し、予定時間を超える議論となりました。会場からのアフガニスタンの女性についての質問に中村氏は「現地では男性が外を、女性が内を担当します。女性を敵にしたら何も進められないのは、世界中で共通のこと」とユーモアを交えて応じ、会場は笑いと拍手に包まれました。

VOICE

▼直接、お話が聞けて、本当によかった。30年にわたる努力に感動しました。アフガニスタンの大地に緑がいっぱいになり、成果が出ていますね。日本に福岡に、中村さんがいることをうれしく思い、誇りに感じます。角洋子さん(左:志免町)▼私はペシャワール会の会員です。年会費で日本からアフガニスタンの支援ができます。武力ではなく、協力する心だ、という言葉が印象的でした。浜田真理さん(右:筑紫野市)



学校訪問

■実施日／9月2日(月)11:10～16:35
■会場／筑紫女学園中学校及び高等学校 講堂
■実施日／9月11日(水)10:00～11:40
■会場／西南学院高等学校 体育館
■実施日／9月13日(金)14:40～17:00
■会場／福岡県立福岡高等学校 体育館



県立福岡高校

3つの学校を訪問し、4,500人を超える生徒に語りかけた中村氏。講演では、世界中が画一化の方向に向かっていることに警鐘を鳴らし、多様性を認める気持ちの大切さを訴えました。また、アフガニスタンの干ばつの状況を説明しながら、水の問題は自然と人間の関係で生まれる問題であり、アフガニスタンで起こっていることは、日本でも起きる可能性がある」と指摘しました。また、用水路が全線開通したとき、これで生きていけると農民たちが大喜びしたエピソードを紹介。「苦難続きなのに現地の人々は暗い顔を見せず、むしろ、日本人のほうが暗い顔をしている。人間は金や地位や仕事や娯楽…持てば持つほど暗くなるのかもしれない。都市空間は、人間が何でも意のままにできると錯覚させる。人間と自然の関係を真剣に見つめ、根本的な生き方を問い直す時期が迫っているのではないかと、生徒たちに問いかけました。

筑紫女学園高校では「やりたいと思ったことを成し遂げるために必要なものは」という生徒の質問に「決して根性とか信念ではない。それよりも、人を許し、受け入れ、愛する気持ち」と答えました。

西南学院高校では、「現地の人とのコミュニケーションで苦労したことは」との質問に「言葉や習慣、宗教が違うため、とにかく誤解の連続。しかし、一緒に仕事をする中で、お互いに分かち合える何かがあるはずと信じてきました」と力を込めて答えました。

中村氏が17回生である福岡高校では、後輩たちから進路に関する相談も持ちかけられ、「医者を目指す者にとって大切なものは」という生徒の質問に「医者は技術者であってはならない。一見医療とは関係のないような医学以外のものも知っておかなくてはならない」と諭しました。

次代を担う若者の視野を広げることにもつなげた講演会でした。



筑紫女学園中学校・高校



西南学院高校

第24回 学術研究賞 受賞者

テッサ・モーリス＝スズキ
Tessa MORRIS-SUZUKI

オーストラリア/アジア地域研究

Tessa
Morris-Suzuki



市民フォーラム

草の根社会からアジアへと架ける橋 ～国境を越える日本の豊かな伝統～

■開催日/2013年9月15日(日)17:30～19:30
■会場/アクロス福岡地下2Fイベントホール
■参加者/210人



緊張の時代にこそ、大切な民際関係 次世代のために、見えざる架け橋を築く

<第一部 基調講演>

私はイギリスで生まれ、大学を卒業し、世界を見てみようと思って1973年にはじめて日本にやってきました。これまで50回以上も来日していますが、初来日から40年、東北アジアでの最も大きな変化は、人々が越境し、交流する事例が増大していることです。最近では領土問題や歴史認識問題などで、日本と近隣諸国との間で緊張が高まっています。こうしたニュースにばかり接していると、日本と隣国に築かれた草の根レベルの架け橋が、見えなくなるのではないのでしょうか。国際関係ではなく民と民との“民際関係”は、注目されることが少なくほとんど知られていません。ですから、この40年間に私が出会った、隣国との架け橋を作ろうとしている人々を紹介したいと思います。

まずは、長野県佐久市の「平和と手仕事 多津衛民芸館」。在野の思想家・小林多津衛氏の弟子たちが受け継いだ哲学は「自分の頭で考え、自分で判断すること」。住民たちは多彩なプロジェクトを展開し、今年は「農村発住民白書」を作成。活動は近隣諸国へも広がっています。夏には著名な韓国の歴史家を招き「朝鮮戦争休戦60年」記念シンポジウムを開催。県内に移住した東南アジアの女性を支援する活動にも取り組んでいます。

一人でも架け橋づくりに取り組むことができると教えられた

のは、仙台市に住む金順烈(キム・スニョン)さん。在日コリアン2世の彼女は、アジアの農村女性とのネットワークを構築し、工芸作品の即売会を開催。仙台を拠点にマイノリティと日本人の交流グループを設立し、活動しています。

北方少数民族ウィルタ族出身の二人の兄妹は、戦前のカラフトで日本の臣民教育を受けましたが、終戦後、日本国籍のない二人は北海道へ渡ることができませんでした。1957年の日ソ国交回復後によく北海道に移住しましたが、差別に苦しみました。こうした少数民族の苦難の歩みは歴史のページから抜け落ちています。70年代に民衆歴史家が立ち上げた「オホーツク民衆史講座」の中で初めて自分たちの生い立ちと文化を語りました。その後、「空知の民衆史を語る会」が結成され、これは90年代の「東アジア共同ワークショップ」の活動へと引き継がれ、アジアの様々な地域から若者たちが集い、これまで1000人以上が参加しています。

現在、東北アジアに緊張と摩擦が生じているからこそ、こうした民際関係がより重要になってきます。次の世代のために、新しい見えざる橋を架け、戦争のない平和な社会を築くために、希望を携え、未来へ向けて歩みは始めましょう。

もう少しだけ、世界を平和にできるはず

<第二部 パネルディスカッション>



●コーディネーター
竹中 千春
立教大学法学部教授



●パネリスト
伊豫谷 登士翁
一橋大学名誉教授

日本研究家、歴史家、文化研究家…テッサ氏の幅広い研究活動には、いろんなワードが思い浮かぶという竹中氏は、「不思議の国のアリス」になぞらえ、「未知の分野へ軽々と進み、新しい発見をしてしまう」と紹介。1990年代の共同研究プロジェクトが最初の出会という伊豫谷氏は、テッサ氏の研究スタイルには「人々の営みや思いへの優しいまなざしと、不正義や不条理への激しい憤りがある」と指摘します。これを受けてテッサ氏は、歴史研究の上で過去の人間の行動を裁くことができるか、という問題を取り上げ、「当時の事情をできるだけ詳しく調べ、状況を把握した上で、倫理的な判断を下すことができる」と主張。「ただし、私たちの行動も当然、将来の歴史家によって裁かれることになる」と明快なスタンスです。世界平和の可能性について、会場からの質問には「草の根の交流は、お互いの顔を見て互いに人間として認め合うことが平和の基盤となります。そして、草の根と国家の間にあるメディアの果たす役割は重要です。様々なことが必要ですが、もう少しだけ、世界を平和にすることは可能だと信じています」と希望にあふれた解説を披露しました。

VOICE

▼私たちは毎日の生活の中で一喜一憂していますが、こうしたハイレベルな歴史認識を聞くと、世界を見る視点が変わり、とてもいい刺激になりました。中島久泰さん(左:博多区)▼毎年、福岡アジア文化賞の市民フォーラムが楽しみです。今年は中村哲さんとテッサさんを聞きました。草の根活動の大切さに、改めて気付きました。それと、テッサさんの日本語がとても上手なのに驚きました。中島幹恵さん(右:同)



学校訪問

■実施日/9月13日(金)14:30～17:30
■会場/福岡県立修猷館高等学校 視聴覚室

視聴覚室は参加を希望した生徒でぎっしり満員。テッサ氏は自己紹介の後、スライドを映しながら講演をはじめます。大学卒業後に来日した動機、日本での出会いや体験を語り、日本にいた当時、サハラには行けなかったこと。「しかし、日韓国交正常化していたので、2週間ほど韓国をまわったとき、田舎の人たちはとてもよくしてくれました」と振り返ります。当時に比べて日本と周辺諸国との交流は盛んになっていて「私は研究者として各地を訪ね、歴史の変化を知るのは幸せなこと」と喜びを語ります。最近の領土問題による近隣諸国との危機的な状況。こうした危ない面ばかりを見ていると、人々の草の根交流が見えなくなることを憂慮し、「素晴らしい民際関係ができていのに、メディアで十分に報道されていない」と指摘。「各地にたくさんある、タンポポのように希望の種を広げる草の根運動。これを受け継いでほしいと願っています」と、若者たちに未来が託されました。



アジア文化サロン

■実施日/9月14日(土)15:00～17:00
■会場/九州大学伊都キャンパス

政治学、社会学、人類学…さまざまな分野で、テッサ氏から影響を受けている研究者と学生約20名が参加。氏は現在、取り組んでいる近現代日本と東北アジアに関する国際共同プロジェクトについて説明し、「いま、東北アジアは大変に重要な転換期を迎えている」と強調します。日清・日露戦争を朝鮮半島の支配権を争う第一次朝鮮戦争、日本帝国が崩壊し、冷戦構造の枠組みを決める1950年～53年の朝鮮戦争を第二次朝鮮戦争、現在、私たちが直面している状況を、第三次朝鮮戦争と位置づけ、「朝鮮半島では冷戦は依然として終了していないため、これが東北アジアの不安定さの要因ともなっています」というテッサ氏。「第一次と第二次の朝鮮戦争が、周辺国に与えた影響の詳しい検証が必要」と、今後の研究の方向性を示され、その後参加者と活発な質疑応答と議論が繰り広げられました。



第24回 芸術・文化賞 受賞者

ナリニ・マラニ
Nalini MALANI

インド／現代美術

N. Malani



市民フォーラム

より良い社会の実現のために ～世界とアートの可能性～

■開催日／2013年9月14日(土)17:00～19:00
■会場／アクロス福岡地下2Fイベントホール
■参加者／210人



女性の視点を生かす社会へ 平和のため、アートに活力を

<第一部 基調講演>

私が初めて訪ねた外国、それは日本でした。12歳のときで、鎌倉の大仏を見たいと思いましたが、その印象は「平和」でした。私は理想とする平和のために、アートに力を注ぎたいと思っています。

機械的なライフスタイルの影響で、私たちの地球はどんどん変わっています。それを防ぐには、社会を女性化すること、女性の視点を持つことが、一層重要になっています。注目してほしいのは、インドでは今なお女性が、男性の支配や宗教的な正当性の支配下で抑圧され苦しんでいることです。私は19歳のときに開いた初の展覧会の場で、年配のアーティストから「こんな制作活動なんかやめて、主婦になるべきだ」と言われました。今ではそう言われたことに感謝しています。なぜならこの言葉こそが、私に火をつけたからです。私は、女性アーティストに呼びかけ、1987年にインドで初の女性だけの企画展示展を開催し、3年以上も続けました。

80年代から始まった政治や経済の変化の中で、アートが注目を集めるには、人々が参加できるアートが必要であり、ストリートでアートに参加できないかと考えてみました。当時、ボンベイは階級間の対立が激しく、スラムが一体どのようなものか、ブルジョアの人々に目を覚まして見てもらうことが必要だと思い、作品の中で豊かな人々に貧しい地域を歩いてもらう試みも行いました。

チェルノブイリ原発事故による放射性物質で汚染された粉ミルクが、インドに輸出されました。92年に女の子を産んでいた私は恐怖に捕らわれ、化学物質や放射性物質の子どもへの影響を心配する母親を表現した、暗いイメージの作品を制作しました。98年5月11日、インドが地下核実験を実施し、人々には「我々は核兵器を持ち大国になった」と高揚感がみなぎりましたが、その後すぐに、パキスタンも核実験を行います。ガンジーが示した非暴力の道は、この核兵器保有で吹き飛んでしまったのです。5月11日は仏陀が生まれた日なのですが、この日に核実験が行われたのは皮肉なことです。

99年～2000年の半年間、私は福岡に滞在し、福岡の舞踊家と「ハムレットマシン」を制作しました。この作品は福岡アジア美術館で、素晴らしい日本語の翻訳付で見られますが、ヒンドゥー教とイスラム教の対立、そして社会主義とグローバルな資本主義の間で、ハムレットのように揺らぐ当時のインドを表わしています。

最近、インドではレイプ事件が多発していますが、若い女性アーティストたちが街頭にテーブルと椅子を持ち出し、街を歩く男性を椅子に誘って語り合うパフォーマンスを展開しています。そこで女性アーティストは、男性に対して、なぜ女性をレイプしたいのか、レイプは女性の体を傷つけ、壊すものだと言っている

とで、コミュニケーションを深めようという活動です。現在、この運動は多くの人々に影響を与え、インド各地に広がっています。

両性の考え方を、どちらも持つ私たち <第二部 パネルディスカッション>



●モデレーター
後小路 雅弘
九州大学大学院人文科学研究院教授



●ディスカッサント
小勝 禮子
栃木県立美術館学芸課長

続くパネルディスカッションでは、後小路氏が、作品の根源的なテーマである暴力の捉え方について尋ねると、マラニ氏は「暴力は男性と女性の考えの不均衡から起こるもの。男性的な考え方と女性的な考え方、私たちはそのどちらも持っています」と明快に回答。これを小勝氏が「生物学上の男性、女性ではなく、ナリニさんが言う女性性とは、暴力を容認しない、つまり弱者の側の思想ということですね」と解説。さらに、マラニ氏から「私の作業は暴力の描写ではなく、暴力に対する不安や懸念を描いており、そのため作品はどんどん複雑となり、リアル感も増えていくのです」と、創作の核心に触れました。後小路氏がマラニ作品の複雑な重層性を指摘すると、「私が作品に散りばめた引用や意図を、すべて理解する必要はありません。むしろ、作品と向き合っただけで感じてほしい」と訴えました。

VOICE

▼実に面白い内容でした。型にはまっていない絵が描ける素晴らしい才能で、彩色もきれいですね。伝統的な影絵の影響も受けているようで、博多の流瀧頂の武者絵を思わせるような幻想美が感じられます。立石武泰さん(左:博多区)▼作品にもお話にも感動しました。作品を見て、感じて、コミュニケーションして…。そんな態度で鑑賞してほしいというメッセージに、優しさを感じられますね。長尾萌佳さん(右:東区)



学校訪問

■実施日／9月13日(金)13:00～16:00
■会場／福岡市立長尾中学校 体育館

生徒が作った紙のアーチを通り、マラニ氏が全校生徒の拍手に迎えられて登場。初来日とき、どうしても見なかったのが、鎌倉の大仏と習字。「日本の漢字は非常に人間的なもの」ということで、40歳になってから作品に取り入れ、署名のように扱っているとのこと。インド国旗の説明に続いて、自分の作品について映像を見せながら、次々と解説。スライドやビデオクリップで見る作品は、どれも強いメッセージが込められていて、鮮やかな印象を心に残します。マラニ氏は「私の作品を難しいと思う人は、とにかく感じてほしいと思います」とアピール。閉会后、校長室で美術部3年生の生徒3名が制作した絵や鉛筆デッサンにアドバイス。にこやかに優しい口調で、良い点がさらに良くなるように褒めながら助言する指導に、最初はやや緊張気味だった生徒たちも、次第に気持ちがあほくれた様子でした。



アジア文化サロン

■実施日／9月15日(日)10:30～12:00
■会場／福岡アジア美術館 彫刻ラウンジ

冒頭、マラニ氏から、福岡アジア美術館に展示中の自身の作品を前に、丁寧な解説があり、サロンに参加した九州大学美学美術史専攻の学生約20名は、本人解説付きの作品鑑賞に大感激。進行の後小路氏より「作品を前にしているんな話をお聞きしたいと考え、急遽、美術館で行うことになりました」と説明。学生から寄せられる「描いた絵を消す意味は?」「描く作業と身体性の関係は?」といった質問に、マラニ氏は丁寧に回答。「他の美術家との共同作業のとき、心がけていることは?」という質問には「作業の途中で必ず意見の違いが出てきます。その際は作業の手を止め、お互いに気持ちを落ち着けて話し合うことです。それは決して妥協ではなく、お互いが触発し合う魔法のようなプロセス。ですから、最終的にできるものは、作りはじめたときには、誰も予想もしなかったものに到達できるのです」と助言。学生たちにとって、非常に有意義な時間となりました。



第24回 芸術・文化賞 受賞者

アピチャツポン・ウィーラセタクン Apichatpong WEERASETHAKUL

タイ / 映画、視覚芸術



“アピチャツポン・マジック”とは何か ～自作を語る～

市民フォーラム

■開催日 / 2013年9月15日(日) 13:00～17:00
■会場 / イムズ9F イムズホール
■参加者 / 220人



何が真実か、その定義は難しい 見つめるのは、現実と虚構の境界線

石坂氏(司会):アピチャツポン氏は大変に若い気鋭の映画監督であり、現在43歳。これまでの最年少受賞記録を更新しました。今日は監督の3作品を上映。この後、上映する短編フィルムは「The Anthem (アンセム)」。

そして、監督の長編デビュー作「真昼の不思議な物体」は、足の不自由な少年と家庭教師の間で起こった物語を、何人もの人が語り継いでいくという内容です。それから、監督の代表作「ブンミおじさんの森」は、2010年のカンヌ映画祭で最高賞のパルム・ドールを受賞。東南アジアの監督では初の快挙です。

<対談>

梁木氏:このフォーラムのタイトルに“アピチャツポン・マジック”という言葉が使われていますが、こんな言葉があるのですか。

アピチャツポン氏:この言葉をいただいて光栄に感じています。そもそも映画そのものが光と影で描き出すマジックですから、これは私の作品だけではなく、すべての映画に言えることでしょう。

梁木氏:監督の出現は映画を変えたと、私は思っています。100年と少し前にヨーロッパではじまった映画に、アジアの監督が大きな変革をもたらしています。

アピチャツポン氏:映画自体まだ歴史が浅く、若い媒体ですし、特に技術的な進歩はまだ期待できます。3Dや高精細画像の技術も生れたばかりで、私自身、その可能性にワクワクしていま

す。映画のさまざまな可能性を切り開いていく旅は、決して終わることのないネバーエンディング・ジャーニーです。

梁木氏:映画のはじまりは2通りあって、演劇を映画で再現したものと、現実を切り取るドキュメンタリーもの。監督は原初の映画を作っていると感じますが、それこそが変革者と言われる理由だと思います。

アピチャツポン氏:従来の映画は、物語を伝えるなど映画が媒体になっていますが、映画には映画自体の可能性があり、私はそれを追求したいのです。私の映画では物語を読んでいるような気分にはならないでしょう。

考えるのではなく、 感じて理解する

梁木氏:最初から答えがあるものとして見ると、監督の映画は分



●司会
石坂 健治
日本映画大学教授
東京国際映画祭アジア部門ディレクター



●対談者
梁木 靖弘
アジアフォーカス・福岡国際映画祭ディレクター

かりにくい。誰かが超越的な視点や立場で語り、答えを用意してはいないから。監督の映画は「自分の立ち位置を変えると、映画が理解できるよ」と言っているかのようです。

アピチャツポン氏:私の映画は、私が見聞きするものを観衆と共に共有したいという思いで作っています。一緒に旅をしているような感覚です。多くの映画では監督が観客より上位にいます。観客は監督が各場面に用意した様々な伏線を探りながら映画を見ます。ストーリーも、監督が予定した結末が実現すると感動して、満足できるようになっています。私の映画では私と一緒に歩き、探しているような気持ちを体験できるものを目指しています。

はじめて私の映画を見た人には分かりにくいと思いますが、それは人間関係と同じで、初対面の人をすぐに受け入れるのは難しく、受け入れるのに2時間くらいはかかります。一人の人間を理解するには、考えるのではなく感じる必要があります。

梁木氏:監督の映画では夢とか幻とか、頭の中に浮かんだイメージや、生や死さえも並列に並べられて区別がありませんね。

アピチャツポン氏:タイでは、目には見えない力が存在し、一本一本の木にも精霊が宿っていると信じられています。何が真実なのか定義することは難しい。例えば信仰を持っている人にとって神がいることは真実ですが、持たない人にとってはそうではありません。私は心をオープンにして、現実とフィクションのボーダーラインを見ることにしています。

梁木氏:物に心が宿る。日本も同じですが、日本の監督は、そういう感覚の映画からは遠ざかっているようです。

アピチャツポン氏:そう感じてもらえるのは、私が意識的にやってきたからですが、日本の映画監督にもいらっしゃると思います。

VOICE

▼個性と多様性がいつばいつまった作品ばかり。演出方法も印象的で、視覚的なモノクロのテクスチャーもきれいでしたね。梶田枝里さん(左:東区)▼ホントに素晴らしい。自分のライフスタイルを変えたいと思うほど、刺激的でした。Mr.Ken Westmoreland(中央:東区)▼作品では森の音に癒され、気持ちがよかったです。対談では制作現場の裏側まで話してくれて、監督の人格が感じられました。山木圭さん(右:中央区)



学校訪問

■実施日 / 9月13日(金) 9:30～16:30
■会場 / 福岡女学院大学、油山市民の森、天神市街地
福岡女学院大学天神サテライト

今回のワークショップの参加者は福岡女学院大学の学生20名。参加者は、午前は緑豊かな油山の自然の中で、午後は天神の都市環境の中で、目で見えたもの、耳を澄まして聞こえた音、そのとき思い浮かんだ情景や物語、文章や単語などをメモしました。散策後のミーティングでは参加者が気になった「コーヒョップで見かけた、お洒落なおばあちゃん」をはじめとする複数の人物について、質問を繰り返しながら人物像を創り上げるという監督の手法を体験。その後は皆で集めたキーワードを使って自由に物語を紡ぎだす試みに挑戦しました。出来上がった破天荒な物語に「みんなでひどい物語をつくってしまったけど、ホントにオリジナルな物語だったよね」と笑う監督。「この話がいい話なのか、悪い話なのかと先に考えてしまうと、その時点で自分の想像力を邪魔してしまう。どんな創作活動でも自分の想像力を優先することが大事。」と創作活動のポイントをアドバイスしてワークショップを締めくくりました。



アジア文化サロン

■実施日 / 9月14日(土) 14:00～16:00
■会場 / キャナルシティ ビジネス棟会議室

九州産業大学芸術学部デザイン科・黒岩俊哉教授の司会で、アピチャツポン監督の短編映画の上映も挟みながら監督のプロフィールを紹介。続いて監督と参加者の対話形式でプログラムは進行。「ブンミおじさんの森」が大好きという参加者に対して「人間、虫、いろんな生き物が、過去も現代も同じレベルでつながっているアジアの感覚」と述べ、穏やかな雰囲気質問に答える監督。時折、質問の内容に近い自身の制作した映像をスクリーンに映して解説します。森を舞台にした作品が多いという指摘には「森に対してミステリアスなものとして興味を持った。人間は森で生まれ、森から出てきた。今、人間は都市に住み、森から離れて暮らしているが、磁石に引き寄せられるように森に帰ろう、という思いを抱いている。古くから人間は森に対して恐れ、アニミズム、もののけ、幽霊、自然など多面的な誘惑を感じてきた」と、森への思いを語りました。



国内・海外会見および広報活動、報道実績

受賞者発表記者会見

6月7日に福岡市で受賞者発表記者会見を開催しました。高島福岡市長からのあいさつの後、鎌田よかトピア記念国際財団理事長より4名の受賞者が発表されました。続いて有川九州大学総長より、選考経過と贈賞理由の説明があり、清水副委員長と藤原委員長から各受賞者の業績や魅力について、映像等を使って分かりやすく解説が行われました。

そして今年は特別に地元福岡県出身の大賞受賞者・中村哲氏が会見に登場!福岡アジア文化賞大賞を受賞された喜びや活動状況などをお話いただきました。



【受賞者発表記者会見】

- 日 時:平成25年6月7日(金)
- 会 場:ソラリア西鉄ホテル(福岡市)
- 出席者:
 - 高島 宗一郎 福岡市長(文化賞委員会名誉会長)
 - 鎌田 迪 貞 (公財)よかトピア記念国際財団理事長(文化賞委員会会長)
 - 有川 節 夫 九州大学総長(審査委員長)
 - 清水 展 京都大学東南アジア研究所教授(学術研究賞選考副委員長)
 - 藤原 恵 洋 九州大学大学院芸術工学研究院教授(芸術・文化賞選考委員長)
 - 中村 哲 PMS総院長・ベシヤワール会現地代表(第24回福岡アジア文化賞大賞受賞者)

広報活動

様々なツールによる広報活動

今年初めて、福岡市内各所のバスシェルターに大型広告を掲出して福岡アジア文化賞を広く告知したほか、ポスターの掲示、チラシの配布に加え、市営地下鉄における中吊り広告も実施。また、ホームページやfacebookでの最新情報や受賞者に関する情報の配信に加えて、twitter(ツイッター)による市民フォーラム会場の様子や受賞者の活動状況などリアルタイムな情報発信も行いました。さらに、海外の記者会見で受賞者や文化賞事業、福岡市のプロモーションを行いました。



市内のバスシェルター広告

報道実績

【報道件数】
国内:192件 国外:71件 計 263件 (2013年12月現在)

<p>●日本 中村 哲氏</p>	<p>●オーストラリア テッサ・モーリス＝スズキ氏</p>	<p>●インド ナリニ・マラニ氏</p>	<p>●タイ アピチャッポン・ウィーラセタクン氏</p>
----------------------	-----------------------------------	--------------------------	----------------------------------

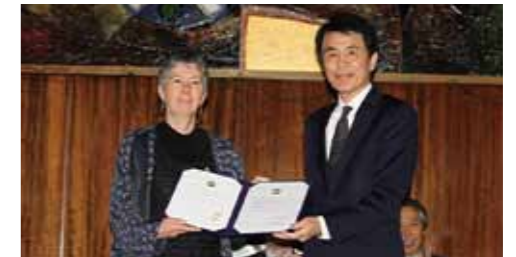
海外記者会見

6月の受賞者発表を受け、それぞれの受賞者が活躍する地で、受賞決定や受賞報告の記者会見を開催し、現地の政府機関や日本国大使館をはじめ、歴代の受賞者や現地メディアなど多くの参加をいただきました。この海外記者会見では、福岡アジア文化賞の意義や受賞者の功績とともに福岡市の紹介を行い、その模様が各地で報道されました。

Tessa MORRIS-SUZUKI

- 受賞者/ テッサ・モーリス＝スズキ氏
- 開催地/ オーストラリア(キャンベラ)
- 開催日/ 7月9日(火)
- 場 所/ オーストラリア国立大学
- 参加者数/ 50人
- 【主な来賓・出席者】
 - サム・グランハード 氏(オーストラリア研究会議エグゼクティブ・ディレクター)
 - ケン・ジョージ 氏(オーストラリア国立大学文化言語歴史学部長)
 - 秋元 義孝 氏(在オーストラリア日本国大使)

会場のオーストラリア国立大学では、ちょうど豪州国内外から日本研究者が集まる研究大会が開催されており、大学と共催した会見には同大会に参加した研究者も招待して、テッサ氏の受賞と福岡アジア文化賞をアピールしました。



Apichatpong WEERASETHAKUL

- 受賞者/ アピチャッポン・ウィーラセタクン氏
- 開催地/ タイ(バンコク)
- 開催日/ 8月2日(金)
- 場 所/ サイアム・ソサエティ
- 参加者数/ 80人
- 【主な来賓・出席者】
 - ドーム・スクボン 氏(タイ国立フィルム・アーカイブ所長)
 - チャーウィット・カセートシリ 氏(第23回福岡アジア文化賞学術研究賞受賞者)
 - アピナン・ボシャナンダ 氏(タイ王国文化省現代美術文化室長)
 - 佐藤 重和 氏(在タイ日本国大使)

アピチャッポン氏のタイ国内での知名度の高さを反映して、地元テレビ局のカメラを含め、多くの報道機関が取材する中での会見となりました。記者会見の様子は、アピチャッポン氏へのインタビューと併せて同日各局のニュースで放映されました。



Nalini MALANI

- 受賞者/ ナリニ・マラニ氏
- 開催地/ インド(ムンバイ)
- 開催日/ 10月26日(土)
- 場 所/ ロイヤル・ボンベイ・ヨットクラブ
- 参加者数/ 50人
- 【主な来賓・出席者】
 - タズニム・メータ 氏(バウ・ダジ・ラッド・ムンバイ市美術館館長)
 - ブンティ・チャーン 氏(アジアソサエティ・インドセンター所長)
 - 浅子 清 氏(在ムンバイ日本国総領事館総領事)
 - ワーナー・ニーバーゲルト 氏(在ムンバイ・スイス総領事館総領事)

100年以上の歴史を誇るヨットクラブを会場に、受賞の報告とあわせて授賞式をはじめとした公式行事の様態を映像で紹介しました。受賞をきっかけに新たに世界3カ所の美術館でナリニ氏の個展が開催されることが決定したという嬉しいニュースも報告されました。



アジアパーティ、文化賞関連イベント

Asian Party

Asian Partyとは…

1990年に始まったアジアマンスは、当時、まだ近くて遠いアジアを“知る”ためのイベントとして重要な役割を果たしてきましたが、20年以上が経ち、アジアが以前よりとても身近になったことから、“アジアと創る”をコンセプトにした「アジアパーティ」として今年から生まれ変わりました。

アジアパーティは、“アジアのヒト・モノ・情報が集う社交場”をイメージして、歴史ある「アジア太平洋フェスティバル」、「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」、「福岡アジア文化賞」の内容を更に充実するとともに、新たに「The Creators」などのクリエイティブなイベントも加えて、9月から10月にかけて開催されました。



The Creators

■平成25年10月11日(金)
■福岡市役所西側ふれあい広場



アジアフォーカス・福岡国際映画祭

■平成25年9月16日(月祝)～23日(月祝)
■キャナルシティ博多
(ユナイテッドシネマ・キャナルシティ13)



アジア太平洋フェスティバル福岡2013

■平成25年10月12日(土)～14日(月祝)
■福岡市役所西側ふれあい広場、博多口駅前広場



Asian Party各事業との連携企画

アピチャップン氏受賞記念シンポジウム&上映会 in アジアフォーカス・福岡国際映画祭

■平成25年9月16日(月祝)
■キャナルシティ博多(ユナイテッドシネマ・キャナルシティ13)



マラニ氏受賞記念「ナリニ・マラニ特別展示」 in 福岡アジア美術館

■平成25年9月12日(木)～12月25日(水)
■福岡アジア美術館 7階アジアギャラリー



アピチャップン氏が福岡市へフィルム寄贈!

今回の受賞を記念してアピチャップン氏から、世界に9本しかないショートフィルム「The Anthem(アンセム)」を福岡市に寄贈頂きました。寄贈されたフィルムは福岡市総合図書館フィルムアーカイブで保存されています。



ショートフィルム「The Anthem(アンセム)」 フィルムアーカイブで保存欄にサイン

福岡アジア文化賞委員会委員

平成25年12月現在

- | | | |
|------|-----------|---------------------|
| 特別顧問 | 青柳 正規 | 文化庁長官 |
| 〃 | 齋木 尚子 | 外務省国際文化交流審議官 |
| 〃 | 小川 洋 | 福岡県知事 |
| 名誉会長 | 高島 宗一郎 | 福岡市長 |
| 会長 | 鎌田 迪貞 | (公財)よかトピア記念国際財団理事長 |
| 副会長 | 有川 節夫 | 九州大学総長 |
| 〃 | 末吉 紀雄 | 福岡商工会議所会頭 |
| 〃 | 森 英鷹 | 福岡市議会議長 |
| 〃 | 貞 刈 厚仁 | 福岡市副市長 |
| 監事 | 本田 正寛 | 福岡市社会福祉協議会会長 |
| 〃 | 清原 英明 | 福岡市会計管理者 |
| 委員 | 浦田 喜久子 | 日本赤十字九州国際看護大学学長 |
| 〃 | 衛 藤 卓也 | 福岡大学学長 |
| 〃 | 海老井 悦子 | 福岡県副知事 |
| 〃 | 大石 修二 | 福岡市議会副議長 |
| 〃 | 尾花 康広 | 福岡市議会第1委員会委員長 |
| 〃 | 川崎 隆生 | 西日本新聞社代表取締役社長 |
| 〃 | 岸 本 卓也 | 毎日新聞社取締役西部本社代表福岡本部長 |
| 〃 | 佐藤 尚之 | 九州運輸局長 |
| 〃 | 佐藤 靖典 | 福岡市レクリエーション協会副会長 |
| 〃 | 新藤 恒男 | 株式会社西日本シティ銀行特別顧問 |
| 〃 | 田口 五朗 | 日本放送協会福岡放送局長 |
| 〃 | 竹島 和幸 | 西日本鉄道株式会社代表取締役会長 |
| 〃 | 多田 昭重 | 福岡文化連盟理事長 |
| 〃 | 田中 浩二 | 九州旅客鉄道株式会社相談役 |
| 〃 | 田中文成 | 日本経済新聞社常務執行役員西部支社代表 |
| 〃 | 田中 優次 | 西部ガス株式会社代表取締役会長 |
| 〃 | 谷 正明 | 株式会社福岡銀行取締役頭取 |
| 〃 | 橋田 紘一 | 株式会社九電工代表取締役会長 |
| 〃 | 広実 郁郎 | 九州経済産業局長 |
| 〃 | 弘中 喜通 | 読売新聞西部本社代表取締役社長 |
| 〃 | 町田 智子 | 朝日新聞社西部本社代表 |
| 〃 | 八尾坂 修 | 福岡市教育委員会委員長 |
| 〃 | 山本 盤男 | 九州産業大学学長 |
| 〃 | G・W・パークレー | 西南学院大学学長 |

(委員名は50音順、敬称略)

歴代受賞者によるイベント

ドナルド・キーン氏 (第2回(1991年)福岡アジア文化賞 芸術・文化賞受賞者) を招いて講演会を開催!

■平成25年12月14日(土)
■電気ビル本館B2F会議室

福岡市は、福岡アジア文化賞受賞者を講師としてお招きする「福岡ユネスコ・アジア文化講演会」を12月に共催しました(主催:一般財団法人福岡ユネスコ協会)。記念すべき第1回目のゲストは1991年に芸術・文化賞を受賞されたドナルド・キーン氏!

91歳と高齢にも関わらず日本文学の研究に対する情熱を失わないキーン氏。日本人が気づかない日本文学の価値を、笑いを交えながら優しく気づかせてくれる講義に、満席となった会場の参加者も大満足の様子でした。



ドナルド・キーン氏 講演会風景



福岡アジア文化賞 歴代受賞者名鑑

FUKUOKA PRIZE Roll of Honor

第1回

1990



創設特別賞

巴 金

BA Jin

(中国/作家)●

『家』、『寒い夜』等、深い人類愛の溢れる作品で世界的に愛読されている現代中国最高の作家。



創設特別賞

黒澤 明

KUROSAWA Akira

(日本/映画監督)●

『羅生門』をはじめ数々の名作で日本映画の存在を世界に知らしめた巨匠。国境・世代を超えた映画人に大きな影響を与えた。



創設特別賞

ジョゼフ・ニーダム

Joseph NEEDHAM

(イギリス/中国科学史研究者)●

中国科学史の世界的権威であり、非ヨーロッパ文明に対する世界の知識人の見方を一変させた。



創設特別賞

ククリット・プラモート

Kukrit PRAMOJ

(タイ/作家・政治家)●

大河小説『王朝年代記』ほか多くの傑作をもつた文豪であり、首相も務めたタイ屈指の文人政治家。



創設特別賞

矢野 暢

YANO Toru

(日本/社会学者)●

日本の東南アジア地域研究の先駆者。国際学術交流にも貢献した。

第2回

1991



大賞

ラヴィ・シャンカール

Ravi SHANKAR

(インド/音楽家・シタール奏者)●

豊かな感受性と幅広い表現力でビートルズにも影響を与えた伝統弦楽器シタール奏者。



学術研究賞

タウフィック・アブドゥラ

Taufik ABDULLAH

(インドネシア/歴史学者・社会学者)

東南アジアのイスラム、地方史に関する意欲的な研究で知られる歴史学者、社会学者。



学術研究賞

中根 千枝

NAKANE Chie

(日本/社会人類学者)

アジア諸地域での豊富な調査に基づく研究により、『タテ社会論』等独特の社会構造論を提唱した社会人類学者。



芸術・文化賞

ドナルド・キーン

Donald KEENE

(アメリカ/日本文学・文化研究者)

大著『日本文学史』をはじめ多くの著作を世に送り、研究の礎を築いた、日本文学研究の国際的権威。

第3回

1992



大賞

金元龍

KIM Won-yong

(韓国/考古学者)●

東アジア全体の視野の中で韓国考古学・美術史学を体系的に位置づけ、その発展に大きく貢献をなした考古学者。



学術研究賞

クリフォード・ギアツ

Clifford GEERTZ

(アメリカ/文化人類学者)●

インドネシアでの調査を通じ、異文化理解のための独自の解釈人類学を築き上げた文化人類学者。



学術研究賞

竹内 實

TAKEUCHI Minoru

(日本/中国研究者)●

社会科学・文学・思想・歴史に亘る総合的な現代中国論を構築した、日本の中国研究の第一人者。



芸術・文化賞

レアンドロ・V・ロクシン

Leandro V. LOCSIN

(フィリピン/建築家)●

東南アジアの風土性とフィリピンの伝統様式の中に現代建築を定着させた建築家。

●は故人

第4回

1993



大賞

費孝通

FEI Xiaotong

(中国/社会学・人類学者)●

中国の伝統文化に基づいた視点からの独自の的方法論により、中国社会を多面的に分析した社会学・人類学者。



学術研究賞

ウンク・A・アジズ

Ungku A. AZIZ

(マレーシア/経済学者)

マレーシアの実証的研究に優れた業績をあげた経済学者。



学術研究賞

川喜田 二郎

KAWAKITA Jiro

(日本/民族地理学者)●

ネパールとヒマラヤ地域の人間の生態を体系的に捉え、KJ法など独自の的方法論を創出した民族地理学の第一人者。



芸術・文化賞

ナムジリン・ノロバンザト

NAMJILYN Norovbanzad

(モンゴル/声楽家)●

モンゴルの伝統的な民謡オルティン・ドーで豊かな表現力を持つ、傑出した声楽家。

第5回

1994



大賞

スパトラディット・ディッサクン

M. C. Subhadradis DISKUL

(タイ/考古学・美術史学者)●

タイ美術・考古学・歴史の世界的権威。東南アジア伝統文化の復興と世界史的な位置づけに果たした功績は偉大。



学術研究賞

王 廣 武

WANG Gungwu

(オーストラリア/歴史学者)

華人のアイデンティティ論などユニークな研究でアジア研究をリードする歴史学者。



学術研究賞

石井 米雄

ISHII Yoneo

(日本/東南アジア研究者)●

タイを中心として歴史、宗教、社会を学際的に研究し、地域研究の発展に貢献した東南アジア研究者。



芸術・文化賞

パドマー・スブラマニヤム

Padma SUBRAHMANYAM

(インド/舞踊家)

インド古典舞踊バーラタ・ナーティヤムの第一人者。実践・創作に加えて舞踊学校の設立など教育面にも貢献。

第6回

1995



大賞

クンチャラニングラット

KOENTJARANINGRAT

(インドネシア/文化人類学者)●

インドネシアにおける文化人類学の確立と発展に貢献した文化人類学者。



学術研究賞

韓 基 彦

HAHN Ki-un

(韓国/教育学者)●

独創的な基礎主義の理論を提唱し、教育理論体系を築き上げた教育史・教育哲学の研究者。



学術研究賞

辛島 昇

KARASHIMA Noboru

(日本/歴史学者)

刻文資料に通暁し、中世南インドの歴史像を書き換えた、アジア史研究の世界的権威。



芸術・文化賞

ナム・ジュン・パイク

Nam June PAIK

(アメリカ/ビデオ・アーティスト)●

テクノロジーと美術を調和させた新しい領域の芸術を開拓した、ビデオ・アートの世界的第一人者。

第7回

1996



大賞

王 仲 殊

WANG Zhongshu

(中国/考古学者)

古代日中交流史の研究に顕著な業績をあげるとともに、中国における考古学の発展の礎を築いた考古学者。



学術研究賞

ファン・フイ・レ

PHAN Huy Le

(ベトナム/歴史学者)

イデオロギーにとらわれない研究姿勢を貫き、ベトナム農村社会史研究に新知見をもたらした歴史学者。



学術研究賞

衛藤 藩吉

ETO Shinkichi

(日本/国際関係研究者)●

中国政治・外交史および国際関係論の分野における日本の第一人者であり、日本外交への提言も数多い。



芸術・文化賞

ヌスラット・ファテ・アリー・ハーン

Nusrat Fateh Ali KHAN

(パキスタン/カワワーリー歌手)●

イスラーム宗教歌謡カワワーリーにおいて並ぶ者のいない、パキスタンの国民的歌手。

第8回

1997



大賞

チェン・ボン
CHHENG Phon

(カンボジア/劇作家・芸術家)

内戦で荒廃したカンボジアにおいて、伝統文化保存の枠組みを構築し、民族精神の回復を訴えた劇作家。



学術研究賞

ロミラ・ターパル
Romila THAPAR

(インド/歴史学者)

独立後のインド史研究を人類史の中に位置づけて実証的に提示し、従来の歴史叙述を一変させた女性歴史学者。



学術研究賞

樋口 隆康
HIGUCHI Takayasu

(日本/考古学者)

フィールドワークを重視し、シルクロード・中国・古代日中交流史考古学的研究の発展に大きく貢献した考古学者。



芸術・文化賞

林 権 澤
IM Kwon-taek

(韓国/映画監督)

韓国の苦難の近現代史を人々の生き方を通して美しく描き出したアジア映画界の巨匠。



大賞

ムハマド・ユヌス
Muhammad YUNUS

(バングラデシュ/経済学者)

「グラミン銀行」を創始してマイクロクレジットで開発と貧困根絶に挑戦するバングラデシュの経済学者。2006年ノーベル平和賞受賞。



学術研究賞

速水 佑次郎
HAYAMI Yujiro

(日本/経済学者)

市場と国家の関係に共同体の視点を盛り込んだ「速水開発経済学」とも称される学問体系を構築した。



芸術・文化賞

タワン・ダッチャニー
Thawan DUCHANEE

(タイ/画家)

タイの画家。現代人に潜む狂気や退廃、暴力、エロス、死などを独特の画風で表現し、世界に衝撃を与えた。



芸術・文化賞

マリルー・ディアス=アバヤ
Marilou DIAZ-ABAYA

(フィリピン/映画監督)

民衆の喜びや悲しみを描き出した作品を通してアジアの心を世界に伝える、フィリピンを代表する映画作家。

第12回

2001

第9回

1998



大賞

李 基 文
LEE Ki-Moon

(韓国/言語学者)

韓国語と日本語、アルタイ諸語の比較研究を行い、新しい視点を導入した韓国語研究の国際的権威。



学術研究賞

スタンレー・J・タンバイア
Stanley J. TAMBIAH

(アメリカ/人類学者)

タイ・スリランカを中心として実証的な研究を行い、オリジナルな解釈を提示した人類学者。



学術研究賞

上田 正昭
UEDA Masaaki

(日本/歴史学者)

日本における古代国家形成過程を、東アジアの視点から解明した歴史学者。



芸術・文化賞

R. M. スダルソノ
R. M. Soedarsono

(インドネシア/舞踊家・舞踊研究者)

芸術学・歴史学・文学などを幅広く研究する一方、舞踊創作・教育にも多大な業績をあげたインドネシアの代表的舞踊家。



大賞

張 芸 謀
ZHANG Yimou

(中国/映画監督)

現代中国の苦難に満ちた歩みを、一貫して農民・民衆の立場から描いてきた映画界の巨匠。



学術研究賞

キングスレー・M・デ・シルワ
Kingsley M. DE SILVA

(スリランカ/歴史学者)

スリランカにおける植民地時代の実証研究を通じて歴史学研究に多大な貢献をした歴史学者。

第13回

2002



学術研究賞

アンソニー・リード
Anthony REID

(オーストラリア/歴史学者)

『大航海時代の東南アジア』などで、民衆の生活史の視点から東南アジア史に新境地を拓いたオーストラリアの歴史学者。



芸術・文化賞

ラット
Lat

(マレーシア/マンガ家)

マレーシアの大衆の生活を基底に、社会の矛盾を鋭利な諷刺の目で切り取って表現したマンガ家。

第10回

1999



大賞

侯 孝 賢
HOU Hsiao Hsien

(台湾/映画監督)

厳しい現実を見つめる眼差しと、台湾の風土と人間への愛を以て「悲情城市」などの名作を生んだ世界的な映画監督。



学術研究賞

大林 太良
OBAYASHI Taryo

(日本/民族学者)

日本民族の文化形成の過程を、アジア諸地域の文化との比較検討において解明した民族学研究的泰斗。



学術研究賞

ニティ・イヨウシーウォン
Nidhi EOSEEWONG

(タイ/歴史学者)

斬新な発想でタイの歴史の大半を書き換えた歴史学者であり、社会的な文章を世に問い続ける文筆家。



芸術・文化賞

タン・ダウ
TANG Da Wu

(シンガポール/ビジュアルアーティスト)

独創的な表現活動で、東南アジアにおける現代美術の創造的発展を主導したシンガポールの現代美術家。



大賞

外間 守善
HOKAMA Shuzen

(日本/沖縄学者)

「沖縄学」を大成し、伝統的な言語・文学・文化の分野を中心に常に沖縄研究をリードしてきた研究者。



学術研究賞

レイナルド・C・イレート
Reynaldo C. ILETO

(フィリピン/歴史学者)

東南アジアで最初の反植民地・独立闘争であるフィリピン革命の先導的研究者。



芸術・文化賞

徐 冰
XU Bing

(中国/アーティスト)

独創的な「偽漢字」や「新英文書法」の創造を通じて東洋と西洋の文化の融合を試み、アジア現代美術の評価を高めたアーティスト。



芸術・文化賞

ディック・リー
Dick LEE

(シンガポール/シンガーソングライター)

シンガポールの多文化社会に生まれ、アイデンティティを追求する中で独特な音楽を開花させた、アジア・ポピュラー音楽の旗手。

第14回

2003

第11回

2000



大賞

プラムディヤ・アナンタ・トゥール
Pramoedya Ananta TOER

(インドネシア/作家)

『人間の大地』はじめインドネシアの民族意識を扱った作品群で民族と人間の問題を一貫して問いつけた作家。



学術研究賞

タン・トゥン
Than Tun

(ミャンマー/歴史学者)

厳密で実証的な歴史学の方法論によりミャンマー(ビルマ)史を塗り替えた歴史学者。



学術研究賞

ベネディクト・アンダーソン
Benedict ANDERSON

(アイルランド/政治学者)

世界規模の比較歴史的研究を推進し、『想像の共同体』でナショナリズム研究に新局面を拓いたアイルランドの政治学者。



芸術・文化賞

ハムザ・アワン・アマット
Hamzah Awang Amat

(マレーシア/影絵人形遣い)

マレーシアを代表する影絵人形芝居ワヤン・クリットのダラン(影絵人形遣い)。



大賞

アムジャッド・アリ・カーン
Amjad Ali KHAN

(インド/サロッド奏者)

インド古典弦楽器「サロッド」演奏の巨匠。「音楽はあらゆるものを超越する」という信念のもと、アジア音楽の精神を広く伝えた。



学術研究賞

厲 以 寧
LI Yining

(中国/経済学者)

中国の経済改革の必要性をいち早く理論的に提起し、改革の実現への道程を準備した経済学者。



学術研究賞

ラム・ダヤル・ラケーシュ
Ram Dayal RAKESH

(ネパール/民俗文化研究者)

ネパール女性に関する諸問題にも取り組む、ネパールの民俗文化研究の第一人者。



芸術・文化賞

ローランド・シルワ
Roland SILVA

(スリランカ/文化遺産保存建築家)

イコモス(国際記念物遺跡会議)委員長を務めアジア遺産の評価と保存に大きく貢献したスリランカの遺跡保存の専門家。

第15回

2004

第16回

2005



大賞

任 東 権
IM Dong-kwon

(韓国/民俗学者) ●
韓国民俗学の開拓者であり、日韓中の学術交流にも大きく貢献した東アジア民俗学界の第一人者。



芸術・文化賞

ドアンドゥアン・ブンニャウオン
Douangdeuane BOUNYAVONG

(ラオス/織物研究者)
ラオス伝統織物の研究と啓蒙活動を通じて、ラオスおよびアジアの伝統文化の保存と継承に大きな貢献をしている織物研究者。



学術研究賞

トー・カウ
Thaw Kaung

(ミャンマー/図書館学者)
貴重な貝葉写本の保存と活用に多大な業績をあげた、図書館学者であり、古文書保存学の泰斗。



芸術・文化賞

タシ・ノルブ
Tashi Norbu

(ブータン/伝統音楽家)
ブータンの民間人としては初めて、音楽を中心に伝統文化の保存と継承に取り組んでいるバイオニア。



大賞

オギュスタン・ベルク
Augustin BERQUE

(フランス/文化地理学者)
欧日の人間社会と空間・景観・自然に対する哲学的思索を重ね、独自の風土学を構築し、日本文化を実証的に捉えて、日本理解に大きく貢献した文化地理学者。



芸術・文化賞

三木 稔
MIKI Minoru

(日本/作曲家) ●
邦楽の現代化と国際化をリードし、日本とアジア、また東洋と西洋の音楽の交流と創造に大きな貢献をなした作曲家。



学術研究賞

パルタ・チャタジー
Partha CHATTERJEE

(インド/政治学・歴史学者)
正統な歴史から振り落とされてきた「声なき人々」の存在を明らかにし、アジアや途上国の視点から先鋭な問題提起を行ってきたインドの政治学者・歴史学者。



芸術・文化賞

蔡 國強
CAI Guo-Qiang

(中国/現代美術家)
北京五輪での花火の演出を手がけるなど、火薬や花火を用いた独創的手法と、中国伝統の世界観に根ざした表現で、芸術表現の新たな可能性を拓いた現代美術家。

第20回

2009

第17回

2006



大賞

莫 言
MO Yan

(中国/作家)
現代中国文学を代表する作家。中国の都市と農村の現実を独特のリアリズムと幻想的な方法によって描いた、世界文学の旗手。2012年ノーベル文学賞受賞。



学術研究賞

シャグダリン・ビラ
Shagdaryn BIRA

(モンゴル/歴史学者)
世界規模でのモンゴル研究のリーダーであり、歴史・文化・宗教・言語にわたる優れた研究業績を残した歴史学者。



学術研究賞

濱下 武志
HAMASHITA Takeshi

(日本/歴史学者)
アジア域内の交易・移民・送金のネットワークに焦点をあて、斬新な方法で地域の歴史像の構築に先駆的役割を果たした歴史学者。



芸術・文化賞

アクシ・ムフティ
Uxi MUFTI

(パキスタン/民俗文化保存専門家)
「ローク・ヴィルサ」を創設しパキスタン文化の基層を実証的に追求し続ける、民俗文化保存の第一人者。



大賞

黄 秉 冀
HWANG Byung-ki

(韓国/音楽家)
韓国の伝統的楽器「伽倻琴(カヤグム)」の伝統を継承し、また新たな音楽独創を融合した演奏家であり作曲家。



学術研究賞

ジェームズ・C・スコット
James C. SCOTT

(米国/政治学者・人類学者)
東南アジアから始まり近現代世界における国家の支配とそれに反発し、抵抗する人々の関係を明らかにした政治学者であり人類学者。



学術研究賞

毛里 和子
MORI Kazuko

(日本/現代中国研究者)
アジア地域研究の共通基盤となる方法的枠組みの構築に大きく貢献した、政治学者であり、日本における現代中国研究の第一人者。



芸術・文化賞

オン・ケンセン
ONG Keng Sen

(シンガポール/舞台芸術家)
現代的な感覚でアジアと欧米の伝統を鮮やかに出合わせる演出作品は、舞台芸術の国際的フロンティアを切り拓く。世界的に活躍する舞台芸術の旗手。

第21回

2010

第18回

2007



大賞

アシシュ・ナンディ
Ashis NANDY

(インド/社会・文明評論家)
臨床心理学と社会学を統合させた独自の方法論によって、鋭い社会・文明評論活動を行う行動的知識人。



学術研究賞

シーサク・ワンリポードム
Srisakra VALLIBHOTAMA

(タイ/人類学・考古学者)
関係諸学を総合しつつ、徹底した現地調査に基づいて、タイの新しい歴史像を再構築した人類学・考古学者。



芸術・文化賞

朱 銘
JU Ming

(台湾/彫刻家)
深い東洋の精神性を示す表現力と常に革新を求める創造へのエネルギーをあわせもつ、彫刻の巨匠。



芸術・文化賞

金 徳 洙
KIM Duk-soo

(韓国/伝統音楽家)
「サムルリ」を創始し、伝統音楽を継承すると同時に先端的音楽を創造し続ける伝統音楽家。



大賞

アン・チュリアン
ANG Choulean

(カンボジア/民族学者・クメール研究者)
「カンボジア人によるカンボジア研究」の立場から、長い歴史に立脚した生活文化要素を自らの民族感性で解明し、発表し続け、さらにアンコール遺跡群の救済事業における国際的枠組みづくりに尽力した民族学者・クメール研究者。



学術研究賞

趙 東 一
CHO Dong-il

(韓国/文学者)
主著『韓国文学通史』全6巻は、韓国文学研究史上の金字塔と評され、趙氏の研究領域は儒教・漢字文化圏全域に及び、韓国、日本、中国、ベトナムの比較文学・比較文明の研究者。



芸術・文化賞

ニールズ・グッチョウ
Niels GUTSCHOW

(ドイツ/建築史家・修復建築家)
南アジアを中心とした歴史的建築や都市への洞察を深め、建造物と都市の保存と修復を建築史学のみならず隣接諸科学を包摂する豊かな学際的研究から高次の哲学的営為として先導してきた建築史家・修復建築家。

第22回

2011

第19回

2008



大賞

アン・ホイ
Ann HUI

(香港/映画監督)
幅広いジャンルで多くの話題作を発表して香港映画界を牽引する、アジアの女性監督のバイオニア。



学術研究賞

サヴィトリ・グナセーカラ
Savitri GOONESEKERE

(スリランカ/法学者)
南アジアにおける人権やジェンダーに関する研究で優れた業績をあげ、高等教育の改革にも尽力した法学者。



学術研究賞

シャムスル・アムリ・バハルディーン
Shamsul Amri Baharuddin

(マレーシア/社会人類学者)
民族問題・マレー世界の研究を東南アジアにおいて一貫してリードする社会人類学者。



芸術・文化賞

フォリダ・パルビーン
Farida Parveen

(バングラデシュ/音楽家)
バングラデシュの伝統的な宗教歌謡「バウル・ソング」の芸術的評価を高め、国際的な普及に貢献した国民的歌手。



大賞

ヴァンダナ・シヴァ
Vandana SHIVA

(インド/環境哲学者)
開発やグローバル化のもたらす矛盾を鋭く指摘し続け、自然を慈しみ、生命の尊厳を守る斬新な思想を語り、多くの民衆を導いてきたインドの環境哲学者。



学術研究賞

チャーヌウィット・カセートシリ
Charnvit KASETSIRI

(タイ/歴史学者)
アユタヤ史の研究において傑出した業績をあげたほか、タイ近現代史の研究成果を教育に取り入れ、活発な啓蒙活動を行うタイ及び東南アジアを代表する歴史学者。



芸術・文化賞

キドラット・タヒミック
Kidlat Tahimik

(フィリピン/映画作家・インスクリプション/パフォーマンスアーティスト・文化観客)
途上国フィリピンに生きる者の矜持と文化帝国主義批判を独特のユーモアに包んで描く作品群を発表してきた、アジアの個人映画作家の先駆的存在。



芸術・文化賞

クス・ムルティア・パク・ブウォノ
G.R.Ay. Koes Murtiyah Paku Buwono

(インドネシア/宮廷舞踊家)
幼少よりジャワ文化を深く学び、300年に及ぶ伝統的宮廷舞踊を広く世に紹介するとともに、中部ジャワ伝統文化の保存と発展に尽力してきた、宮廷舞踊の継承者。

第23回

2012